
続RPGっぽい異世界なう。

hiromaru712

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続RPGっぽい異世界なう。

【Nコード】

N7580T

【作者名】

hiromaru712

【あらすじ】

異世界での大冒険。ぐぐり抜けた試練と闘い。悲しい別れ、そして再会。しかし取り戻した筈の日常は儚く運命の波に飲み込まれる。異世界から現実世界に戻った俺。異世界の巫女の心を宿した初恋の先輩と、大阪旅行に行くことに。新大阪駅で降りるとそこは見慣れぬ船。…まさか、このパターンは！また異世界？ 襲いくる骸骨軍団。懐かしい仲間たち。え！ちよつと待て。なんでこっちの世界にイージス艦が？ 米国海軍の次は魔神クラスの古き悪魔？ こうなりゃヤケだ！行くぜ！行けるとこまで？

新幹線、降りたら船（前書き）

再び異世界に召喚された俺。懐かしい仲間。語られる事情。またウエルトウ探しか……。試練ももれなくデフォルトで？うっわ嬉しくねえ！まあ呼ばれちゃったからには仕方ない。おニューの鎧と剣に身を包み、ウエルトウの騎士！再び！

新幹線、降りたら船

続RPGっぽい異世界なう。

正確には異世界の海に浮かぶ孤島、スウシャル・ドモス島にいる。小高い丘に身を潜めつつ、眼下の平原を伺う。むう。前線基地。この世界のじゃない。俺の世界の近代軍隊の、だ。フェンスで囲われたサッカーコート3面分位の敷地。工事現場の高所足場用の資材？で組まれた見張り台。アンテナ塔：パラボラは、ほぼ水平に海の方を向いてる。でかいプレハブっぽい兵舎？が一、二：十二棟。とは別に、ユニットの鉄板で作られたヘリポート。ヘリはいない。その隣、ありゃ発電施設か？それぞれのプレハブを束なっただ様な太さの電線が繋ぐ。モスグリーンのタンクローリー、でかいジープ、キヤタピラ履いて機関銃載つけた装甲車、サングラスで小銃を背負い、行き来する兵隊たち。そして：こんな、いかにも仮設っぽい施設にも専用ポールに：国旗。海岸からの強い風にはためく星条旗！自己主張強えなあ。やっぱステイツかあ…。せめて別の国ならなあ…。でも好きそうだなあ、アメリカ。異世界への扉とか宇宙がどうにかなっちゃう力とか。ある意味当然と言えば当然？

「どんな？ヒロ。」

ファム。ちょ、見つかる見つかる。一回みんなのそこ戻る。：や、間違いないっすね。アメリカ軍の：多分海兵隊って連中じゃないかと。有事に真っ先に敵地に乗り込んで陣地造って味方の足場を築く：実戦上等！の精鋭部隊っす。

「だとしたら、目的はなんや？やて。」

：流石に見ただけじゃそこまでは。偏見かもしれませんが、アメリカって国は世界の憲兵を自負してて、軍事技術やエネルギー技術：巨大な力みたいなものに対してすっごく貪欲な国なんです。

「：狙いはウエルトウ？」

断定はできませんけど、攻め込んで領土を：とかよりはリアルだと。

「例えばその：アメリカって国がウェルトゥを手に入れたら、どうなると思う？彼らは何をするかしら？」

とウインドウ。うーん：わかんねえよ、そんな事まで。

「ヒロ個人の想像でいいわ。違っていい。向こうの世界の人の意見が聞きたいだけ。」

：そうだなあ。散々実験して研究して仕組みを解き明かして：コピ―を造ったりして、利用する？かな？

「：力のある国のやる事に世界や時代で差なんてないのね。わたしも同じ意見。まさにそういう事をさせない為に、あの塔は建てられたのよ。」

まあそんなことすりゃ色んな世界が無茶苦茶になりそうだなあ。

：にしてもアメリカ軍はどうやってこの世界に来たんだろ？もしかして、もうウェルトゥを手に入れてるんじゃない？。

「いや、それはない。ドモスに妙な連中がうろついとる、って地元漁師の通報があったのは二十日近く前かららしいからな。ウェルトゥはまだ塔にあった。でも奴らは来とった。何か別の方法やろ。」あ、そういやウインドウはどうやって俺たちをこの世界に呼び戻したんだ？ウェルトゥは無くなってたんだろ？塔から。

「これよ。」

ウインドウの手にアイスの棒：あ！ウェルトゥ！俺は奪い取ろうと手を伸ばすが：ウインドウはその手をさっと避けた。

「かつてのこの世界を支配した帝国の元で造られたウェルトゥのコピー。『ワイアド・ウェルトゥ』：安心なさい。事態が収まったら元の世界に送り返して上げるから。」

お前、そんなん持ってるなら最初会った時、言えよ！

「これは非常用。ウェルトゥの探知装置も兼ねてる。使える回数も限られてるし、動作も不安定。あなたたちが来たのも呼んでから二日後だった。まあ、間は良かったけどね。召喚失敗かと思ってたら、

ピンチにいきなり現れて。」

びっくりするだろ！夢で次回予告とか、幻聴っぽく名前呼ぶとか、なんか前フリしろ。って話そらすな。量産型ウェルトウがあるなんて…なんで教えてくれなかった？

「そこまでサービスする義理はないわよ。第一、最初に会った時はウェルトウを閉じる、っていうのも目的の一つだったわけでしょ？こんなものもあるけど…なんて説明したとしても『いや！俺たちはウェルトウを閉じる！』とかなんとか言ってみ向きもしなかったんじゃない？」…ぐっ。

「それ取引対象として魔法のグッズの説明もしようとしたわ、わたし。ロクにどんなものがあるかも聞かないで、その小娘は『あかん！』の一点張り。あなたも小娘の肩持って、『魔法の何かもありません』って言ったわ。きっぱりね。」

…根に持ってる？

「なんなら今から取引を再開してあげてもいいわよ？…あなたの影と引き換えに…」

「駄目よ！清水君！」

またファム…って先輩？

「こんな魔女の残りカスの言うこと聞いちゃ駄目。絶対いい結果にはならない！」「あら…雰囲気が変わったと思ってたけど。良く見ると面白い事になってるわね。あなた。中身と包み紙が入れ替わってる。まあ入れ替わったところで汚さはそのままだけど。」先輩の顔が、さっと紅潮する！わ！先輩もこんななるんだ！

「減らず口をっ！」

飛びかかろうとする先輩を後ろから抱きついて止める。先輩、落ちて着いて！ほら！もなみつ！

「だってあの女が…今、もなみつって呼んだ？」

あ、いや。はい、なんか流れて、その。…調子に乗りました。すんません。

「いえ、いいのよ。あなたにあたしはすぐく迷惑をかけてる。異世

界に来てまで先輩も後輩もない。今後はモナミって呼んで。いいわね？」

はあい。先輩は涙を拭きながら深呼吸した。

「ごめんね、取り乱して。フアタリさんの感情が影響してるのかしら？あのウィンドウって人の全てに、なんか逆なでされて。」

大丈夫。気にしないで下さい。異世界に来ちゃったストレスもあるんだと思います。ウィンドウも：先輩真面目なんだから、挑発するような事言わないよ。

「魔術師だって：影だってわたしには感情があるわ。残りカスなんて言われれば、腹も立つ。」

分かるけど：お前のが数百年、下手すりゃ数千年お姉さんだろ？鼻垂れ小僧の俺たちみたいなのもんにムキになんないよ。大体なんでお前、俺の影なんて欲しいんだ？魔法グッズと引き換えなら影くれる奴くらい探せば他にいくらでもいるだろ？

「……。」

言えないような事に使う気なのか？なら、結局ファミや先輩の言うとおりにしないか。

「違うわ。」何が違うんだよ？

「あなたの影じゃなきゃだめ。」だからなんで？

「：貴重な変わりダネの、サンプルだから。」：異世界人の？

「そうじゃない。塔を訪れる者は皆、ウェルトウに夢中。ウェルトウまであと一步の直前に現れる影女のことなんて誰も気にも留めない。わたしが扉の鍵を開ければろくすっぽ話も聞かず死の罠に飛び込んで：死ぬ。そんな人間を何十人何百人と見て来た。ほんと、意地悪な塔よね。：造った人間も登る人間も、自分の目的の為に残酷で身勝手。でもそれが普通だとわたしは思う。わたしの理解してる人間の、ごく自然な行動。そう思って長い長い時間をあの管理室で過ごした。」

：で？

「あなたは違った。仲間を助けに戻るのに一瞬の躊躇もなかった。」

仲間を見捨てる：『そんなことをすれば、俺は俺でなくなる。』あんな台詞をこの部屋で言ったのはあなたが初めて。それにあなたは、わたしに名前をくれたわ。塔のシステムの一部でしかない、魔女の残りカスの：わたしに。」

「わたしは失った何か：…いいえ、最初から欠けていたのかもしれない。かけがえのない何かをあなたから貰った気がした。影のわたしがこんなこと言うと笑われるかもしれないけど、人として、大事な何かを。」

：笑ったりはしない。けど少々大袈裟だな。そんな大層なこたあしてない。ウィンドウは首を振る。

「…そう言えるあなたが不思議。正直に言うわ。わたしはあなたに興味を持った。もつとあなたを知りたいと思った。けれどあなたは行ってしまう。若くて、はつらつとした感情を持つ、生身の巫女と。」……。

「影にはその人の心が宿る。あなたの影が手元に残れば、研究する時間はいくらでもある。わたしがあなたに感じた不思議。それをあなたの影に問いかけてたり確かめたりしながらなら：退屈な塔の暮らしも少しは充実するかもって思ったのよ。」

：上から目線でものっすごく遠回しに友達になりたいと言われているのか？なんかわからなくはないけど、よくわからんなあ。：ウィンドウ、お前自身がお前の事をどう思ってるか知らないが、俺にとっちゃお前もまったくもう！ってくらい人間らしいぜ。ちょっと黒いこととか巨大牛になっちゃうこととか些細なこった。少しばかり他人と違うからって、すねて周りに当たるのはよそうよ。

「わたしは別に：。」

すねたりしてない、って言うんだろ？ムキになったり素直になれなかったり。そゆところは俺たち、なんも変わらないじゃん。ウェルトゥを捜すのも、アメリカ軍相手にするのもお前の力だけじゃない、みんなの力や知恵が必要だ。意見は言って構わんが、お互いにちょ

こつとずつ優しくしてさ、仲良くやろうぜ。

その時、珍しく先輩がぱつと俺の腕に組みついて来た。

「どう？これがあたしの後輩。清水火炉人よ。バカさ加減が気持ちいいでしょ？」

「…本当に。」

ひどい言われよう…。ウィンドウも否定しろよ！俺そこそこいいこと言ってるね？なんで最後俺がバカだってことで話がまとまるわけ？まあ賢かねえけどさ。俺がぶつぶつ言ってる様子にウィンドウは笑いを堪えてるようだった。あーもう！んな時は声上げて笑え！合理性一本槍の面は割れてんだ！今更ミステリアスきどってんじゃねえ！なんか疲れるなあ、このパーティ構成。

話は丸一日前に遡る。

太陽神エル・エソオの力を借り、海魔ウォルセル・ウォルハアを撃退した俺。みんなとの再会を喜びたいとこだったが、ぶっ倒れて一日寝込んだ。ファムは回復魔法を施してくれたらしいが、目を覚まさなかったそうだ。もったいねえ！全く身に覚えがない！神の力を借りたツケかな？前回ぶっ倒れるほどじゃなかったが。いじけ生活で体力落ちてるのか？気付けば船室でファムに介抱されてた。船室の晚餐で、改めてみんなと再会を喜ぶ。無茶振りの…ン・エレレン…なんだっけ。

「エレレンナンシユタトなんて名前、長すぎて誰も呼ばん。エレンでいいで、ン・ヒロ。やて。」

ヒロでいいっす。クマゴリ…イアゴの群れに襲われて以来っすね。あんときゃありがとうございました。お陰でファタリも無事で。

「聞いたでヒロ。あの後大活躍やったらしいな。うちも最後まで付き合いたかったわ。やて。」

や、それほどでも。アベさんやみんなの力添えがあってどうにかこうにか。

「王都では早くもお前の噂で持ちきりや。ン・ティガ・ポも引っぱりだこで毎日毎晩どこかに呼ばれちゃお前の歌を歌つとる。特に巨大イアゴを倒すくだりは子供に人気でな。ウェルトウの騎士ヒロが伝説になるのも時間の問題や。」

：にやろう。

「イアゴはうちも見てるから、誇張だつてのは分かるが：その後の話はどこまでほんまなん？光の騎士にはさっきなつとったな？空も飛んでたし。巨人になって巨大な怪物を倒したつてのは？」

：すみません。事実です。

「にわかに信じがたいが、お前が言うなら真実だろう。：さすがアパンマ○の血を引く勇者。うちら凡人とはあらゆる意味でスケールが違う。やて。」

○ンパンマンと親戚じゃないってば。たまたま場が上手く転がっただけで。俺だって筋金入りの凡人ですよ。そこは自信あります。エレンは笑った。

「光って飛んで巨人になるような奴が、凡人なわけあるか。さっき海魔を撃退した時のお前。あれだけでも充分伝説になる。神話にも登場し、神々と世界の覇権を争った古き悪魔の石柱をたった一人で退けたんやからな。煌めく鎧、輝く剣、真っ白な翼。海魔の呼んだ雨雲にでっかい穴を開けて、降り注ぐ日の光と共に稲妻のような一撃！ああ、伝説の英雄ってこういうことなんや、と実感したわ。やて。」

：うーん、他人から見るとそう見えるのか。ヤケ半分、捨て鉢半分の出任せ攻撃だったんだが。

「お前と、も一度旅ができて嬉しい。今度は最後までとことんついてくからな。宜しく頼む。やて。」

こちらこそ。エレン。：ン・ヴァルキュリアス。元気そうで。あ、足。人間バージョンに。

「水臭いな、ヴァリーって呼んでくれ。仲間はみんなそう呼ぶんや。今更やけど、うちもヒロって呼んでええか？やて。」

いいよ。：ヴァリー。なんか呼ぶほうが恥ずかしいな。なんでだろ？
「こいつは新しい相棒の魔法の槍、シャベリン。冗談みたいやけど言葉話すんやで、こいつ。ほら挨拶しいや。」

低いこもった声で槍がしゃべる。

「始めまして。ヒロ。うちはシャベリン。太古に造られた魔法の槍。以後お見知りおきを。やて。」

ファム、お前まで声低くしなくてもいいぞ。

「おもしろいやろ？ちよつと理屈っぽくて生意気やけど、そこそこ使える槍やねん。」

「そこそこは聞き捨てなりません、ヴァリー。あなたは短絡的で直情的過ぎる。身体能力に任せ、考えなく動くだけ。うちがいなければ先ほどの戦いでも…」

「分かった分かった。こいつは世界一賢く、主人思いな優秀な槍、シャベリン。これでええか？」

「必要充分と思われます。ヴァリー。」

：テイルズオブ・ヴァルキュリアスでも作って貰って独立したら？お前もう、その槍いればピンで行けるよ。それより何より二人のやり取りを声マネで演じ分けるファムが俺的にツボ。：宜しくね、ヴァリー。シャベリン。ヴァリーが屈託ない眩しい笑顔で笑う。うーん、ジャニーズチック。ジャニーズっぽい爽やかイケメンに負の感情を抱いてしまう所が、俺の人間らしい所。

：ご無沙汰です。アベさん。またこうして会えて嬉しいです。

「すまん、ヒロ。死ぬような目に会いながらようやく帰れたのに、十日と待たず連れ戻して。」

いえ、いいんです。ありやどう見たって俺の世界の連中です。俺を呼んだアベさんの判断は正しいと思います。それに約束でしたし。

「約束？」

アベさんが呼んだら、聞き届ける。ウェルトウの騎士の名にかけて。
「：律儀なやつちゃ。お前は、もう少し損得にさといほうがええ。出世しないぞ。やて。」

師匠譲りで、損な役回りが好きみたいっす。初代ウェルトウの騎士は。アベさんはバルディア、と呟いて笑った。あれか。

「バルディア」ってコナンの世界で言う「バーロー」に当たる言葉か。

「そのウェルトウの騎士だが。」

え？何？もう資格とり消し？調子に乗って結構な回数、随所で名乗っちゃったけど。

「うちが魔の森の主として王に認められ、うちが認めた『ウェルトウの騎士』も王下公認の騎士資格となったんや。」

：でっ！マジで？ いつの間にか異世界で就職…。しかもそこそこのいい立場の、国家公務員！

「申請すれば禄も出る。公の施設にも騎士待遇で出入りできるし、有事の際は領民に協力の要請や徴発の依頼も可能や。禄の申請、しとくか？」

いやいやいや、そんな恐れ多い。給料分の仕事する自信ないし、いつ向こうに帰っちゃうかも分からないのに。とりあえず、保留で。

「まったくバルディアが付くほどの欲の無さやな、ヒロは。貰えるもんなら貰つときやええのに。」

いやでも：こんな、なんちゃって騎士が給料もらっちゃ：あ、そうだ。480ウラーってどの位の金額ですか？すげえ額？

「いや、城下の酒場で酒付きで一食、食べるくらいや。」

千五百円から二千円くらいかな。1ウラー三十円から四十円くらいってことか。太陽神様の神殿か祭壇って王都に？

「あるで。南の神殿がまるまる太陽神の神殿や。」

じゃあそこに480ウラー、俺の名義で寄進を。なんか早く払わないと高額の子とかつきそうで…。取り敢えずそれだけお願いします。

「：あのな。騎士の禄やったらその二十倍はあんで？しかも神殿に寄進したんじゃ、結局ヒロの手元には一銭も残らんやないか。」

まあ、そっすけど。この任務の間：向こうに帰るまでの間だけ、飲

み食いとか宿代とか世話になっていつすか？今回も公務で費用、国持ちですよ。

「ああ、経費の手付けは預かつとる。突然呼んだのはこっちや。そこは心配すんな。食糧も装備も充分な量用意して貰えたしな。」

「そういう鎧、新調したんですね。深いグリーンの革の鎧、金細工の小さな紋章：それでも革なんだ。樹脂で煮固めてある硬い革鎧。前までなめた柔らかい革鎧だったから、若干防御力は高まってんのかな。それでも動き易さ重視か。魔の森の主らしい装備？」

「いや、これはいつもの武具屋からや。塔の一件以来、うちやヒロの剣や鎧を売った武具屋としてえろう繁盛しとるらしくてな。なんも言わんのにあつらえて持って来てくれてん。今後とも是非ご贖員になってな。」

「イチローモデルみたいなことか。」

「ヒロのも預かつとる。：タチ、ヒロの鎧、持って来れるか？」

「皆の給仕をしてた少年が領くとパタパタ走って行った。」

「お前は必ず来るおもてな。積んで来たんや。まさかあんなタイミングで、おまけに巫女まで連れて現れるとは思わんやっただけだな。」

「：すみません。剣とアドバイス、助かりました。」

「謝る奴があるか。助かったのはこっちや。ガイコツたちや異界の連中はともかく、海魔は：ヒロとン・ファタリが来んやったら間違はなく全滅やった。」

「：いや。あれは太陽神様のお力で。次に似たようなことがあっても期待しないで貰えます？神様がそう何度も助けてくれるとは思えないので。」

「太陽神様に気に入られるってのはもう一つの才能やで。前回の力の使い方が神様にとっても相当愉快やったんやろな。」

「そういうもんすかねー。なんか怖いので、なるべく自分たちの力でなんとかしたいっす。」

「その殊勝さにまた力貸したくなるんやろな：お、来たで。鎧下の綿着も剣も新品や。前の鎧と同じサイズやろうが、念の為合わせて

みい。」

：。おおっ！アベさんと同じく固い革鎧！色は濃いブラウン。：！。肩当てが付いてる！ほつれ止めのふち金具が金色でいいアクセントに。おわっ！襟元に：なんか紅い宝石っぽい石が！

「：武具屋の親父、奮発したな。ネッタグアの石や。世界の始まり：原始の炎が結晶になったもの、と言われとる。消えない炎。武運と戦勝を呼ぶ石。武具の装飾の中では最高級やで。」

あ！剣にも！こんな貰っちゃっていいのかな？

「もろとけもろとけ。あの親父、ヒロをダシに高い鎧や剣を売りさばく気や。ネッタグアも大量に押さえとるんやろ。今話題のウェルトウの騎士、異世界の勇者ヒロが使つとるのがこのタイプです、なんて揉み手しとる様が目に浮かぶわ。逆にお前が身に付けんとか親父が困るで。嘘の商品説明になってまうからな。やて。」

：持ちつ持たれつ？ごそごそ。おお！鎧はぴったし！前のよりむしろ！前のは出来合いを手直しして貰ったやつだったけど、今回は目分量であつらえてくれてるっぽい！：剣！：良かった。長さや重さ、刃渡りもグリップの太さ長さも、ほぼそのままだ。親父分かってるなあ。これ変わると一からノウハウ蓄積し直しだからな。鞘も使い慣れた後ろ腰水平タイプ。抜いたり刺したり：あ！これ刀身と刃の金属が違う！刃紋が出来てる！

「ほう。そこに気付くとはな。鋭くなるが割れやすい硬い鋼を、しなやかで粘りのある柔らかい軟鉄で挟んで研ぎ出してあるそうや。最近開発されたばかりの技術で、手間暇はかかるが斬れ味も剣自体の寿命も全然違うらしいで。」

：妙な分野でサムライの国出身であることを実感。：あとで振ってみて。マントもおニュー！ちよつと白っぽ過ぎないか？マントって実は敷物にしたり布団にしたり雨具にしたりユニバーサル布だからこんな白いと汚れが目立つなあ。まあタダだからいっか。着装！RPGフォーム！なんか：かっこ良くね？俺。よくソフトのパッケージにこんな格好の奴いるよ。いかんと思いつつ浮かれる心。

「馬子にも衣装ね。」

ウィンドウ。お前俺の記憶から余計なことわざ勝手に検索すんじゃない。…ん？なんか視線を感じるな。あ、さっきの少年がじいっとこっち見てる。タチ…だったっけ？口の端で笑ってちよいと手を振る。…あ、視線そらされた上、逃げられた。傷つくなあ。

ウィンドウの説明によると、消失したウェルトウの場所はある程度検討は付くらしい。元々ウェルトウが安定して存在し易いポイントが何ヶ所もあり、大概そういう場所は、宗教施設や霊山になってる。

更にウィンドウがもつ探知アイテムは元祖ウェルトウに共鳴する性質があり、弱い魔力を込めることでウェルトウのあらかたの方角が分かるそう。またウィンドウはウェルトウスポットを把握していて、探知アイテムの共鳴具合と鑑みて、現在のウェルトウの位置がある島だと推定した。ウィンドウは俺かファムに事情を聴こうとアベさん家へ。

アベさん家には訓練キャンプに来ていた無茶振りエレンとイケメン☆ヴァリーが。で、4人で王都へ。ファムに会いに行くも禊の儀式中で断じて会わせる事はできぬと門前払い。ウェルトウ探索に向かうから巫女を借りれないかと相談した所、ラムだっちゃ姉さんがついて来た。アベさんは王に謁見し、全ての事情を報告。協力を要請した。すると王から正式にその島の調査依頼が。

実は暫らく前からその島におかしな連中がうろついていると近隣の漁民から通報があったと。ただ余りに辺境なのと、ウェルトウ活性化騒動への対処で調査に人が割けず、後回しになっていたそう。漁民の話では鉄でできた帆のない船やカミナリのような音を立てる飛ぶ機械を見たとか見ないとか。

アベさんは俺の世界の奴らじゃないかと直感。ウィンドウもウェルトウ最終使用者の俺やファムが何をしたか確かめる為、俺を召喚。バハムート扱い？しかし不発。事が事だけに悠長に待ってもおれず、

ばたばた準備してその日の内！に出発。出港から二日目。風向きと潮目の予期せぬ変化から船は禁断の「海魔の盃」と呼ばれる海域に迷い込んでしまった。脱出しようと必死の操船をあざ笑うように突如襲い来るガイコツ軍団。敵の数の多さに辟易するアベさんたち。このままじゃ…という時に、新大阪で降りたつもりで俺とファムが降り立った、と。

消えたのが分かってて、ある場所が分かってるなら…俺、いらなくね？

「おかしな連中の情報がないと、島に着いてからどう動くか決められない。それに島…ウェルトウがあるとされるポイントがね…ちよつと一癖ある場所です。」

…また試練？

「正解！と言っているでしょうね。」

うっわ嬉しくねえっ！

「旧帝国のウェルトウ用神殿があった島なの。まあわたしの塔ほど凝った趣向はないわ。侵入者を食べる森、挑戦者を呑む砂漠、それを越えれば楽園に誘う女神の泉が待つ。」

…女神の泉だけコースでお願いします。

「塔を長年管理してきたけど、ヒロほど短時間で各試練を乗り越えたチャレンジャーはいないのよ。結局仲間から一人の死者も出さずに。あなた…なんていうか場慣れしてる？感じがするんだけど…普段どんな暮らしをしてるの？」

…普通の学生だよ。

「石像の間の時、石像が動く！って一人で見張ってたでしょ。」

…そか。お前モニターしてたんだったな。見事にはずしたよ。悪かったな。

「どうしてそう思った？以前にそういう罠を経験してるの？」

…えーと。

「階段の堂々巡りも、死ぬまで気づかない挑戦者も大勢いる。鎧の

王も仲間がやられたら余計に鎧を倒そうと躍起になるのが普通。闇の間の心の怪物：ニセ巫女を見破ったのはともかく、あんなにあまり自分の心が生んだ怪物だって気が付くなんて。」

：なんて説明すればいいのか。パターンだからな。

「パターン？」

ゲームや、マンガや、映画の。：つまりおとぎ話や創作冒険譚のさ。石像は結局動かなかったし、階段や王の絵、ニセファムナだってもっと早く気付くべきだったと思ったぞ、あの時は。

「そういう：魔法や試練や罠が登場する冒険譚を沢山知ってる、ってこと？」

いや自慢するほどじゃないよ？けどま、平成を生きるオタク青年としては人並みに。

「あなたの言葉、言語中枢と記憶野を参照しても意味が良く掴めない単語が混じってるけど：わたしたちより、魔法や試練や罠のパターンを多く知ってるわけね？」

：そうだな。そうかもな。

「じゃあ呼んだのは正解じゃない。」

……。裁判長！誘導尋問です！

「ウェルトウの縛を解いたのはあなた。取りに行く先の試練や罠に詳しいのもあなた。呼ぶ前に自分から謝罪とともにやって来るべきじゃない？移動の面倒みてあげただけ有難いと思って欲しいわ。」

：このブラックマジシャンガールが！女だから殴らないけど、いつかギャフンと言わせてやる！

剣と夜空と生い立ちと（前書き）

何の因果か異世界の、旧帝国の神殿に向かう船の上。おニユーの剣、試しに振っておかなきゃな。…あ、先輩。眠れないんですか？…俺の二の腕の素肌を先輩の指が伝う！えっ！何この展開！？何フラグ？「…どうしてあたし、あなたを選ばなかったのかな。」見ているのは満点の星空だけ。そしてまさかの…。語る生い立ちに真実がにじむ。

剣と夜空と生い立ちと

で、島に向かう船の中なう。夜も更け皆割り当ての船室で休んでいる。俺はアベさんと同室で、アベさんは既に眠っているが、俺はそっと抜け出して来た。

ジーンズに綿着。鎧下の綿着、前のは要所に綿パットみたいなのが縫い付けられた感じだったが、今回ののは全体がキルトっぽくオシャレな感じに。実家の居間の敷物、こんなだわ。シャツじゃまだ寒いから丁度いい。

船室を出て甲板に上がる。潮風。船の側舷が波を切る音。

おおっ！夜空の星っつ？ 宝石輸送ダンプの横転事故直後！

俺、ロマンチストではないが：敢えて言おう！綺麗であるといや、星見に来たわけじゃないんだった。剣剣。

ちょっと思ったんだけど、使い慣れた寸と重さのこの剣でつむじ風：回す動きの剣線描いたらより小さな力で、より速い斬撃が可能なんじゃないか？という。

ペン回しとかさ、慣れてくるとすっげ軽い力で回せるようになるじゃん？くるっくる行けんじゃん？大事なものは重心とそれ以外のバランスのコントロール。アベ邸居候時代の朝練で一回見せて貰ったんだけど…。

構えて。背筋は伸ばし。膝は柔らかく。右の爪先できゅ、と足元確認。後足はかかと浮かせて猫足に。

力まず、剣の流れの制御を意識して：ひゅひゅっ！：おお！いい感じじゃね？体ごとぐるっで行ってみっか？

眼を閉じ、昼間戦ったガイコツに囲まれてるイメージ…。ぱつと眼見開く！えやっ！しっ！はああっ！よいさ！の、よいしょ！つと！：おし。結構思った感じで振れたぞ。ソフトな相手には有効かも。ハードアーマーな相手には殴って痛めつける直線打撃じゃないと、

か。

感じを忘れないうちにもつかい…あらよっ…いいね。調子で来た。もう袖とかまくっちゃうかな？もつかい。今度は広い範囲を移動しながら。せーのっ…ほい！…もひとつ！くるっ…ねっ！倒れた脳内敵。それでも俺は構えを解かない。倒したという過信が隙を呼ぶからだ…とアベさんの真似。

「パチパチパチパチ！」

拍手？何奴！…ってファムか。どした？眠れないのか？

「ファタリさんは自分の体に帰ってるわ。向こうの身体でもご飯食べなきゃ、でしょ？」

あ！先輩？すんません間違って。今晚は…見られたか。練習。ちよっと眩しげな顔つくったアベさんの真似まで。ハズい！

「…綺麗ね。」

ああ、星でしょ。空気が澄んでるんですよ。なんせガソリンもディーゼルもない世界、ですもん。先輩は船の手すりにもたれかかった。

「……ね。」

風と波の音で聞こえない。俺も剣をしまって先輩の隣にもたれる。すんません、今なんて？

「怖い世界ね、って言ったの。」

…ですね。よく考えたら。

「偉いね。剣の練習？さまになってた。高校時代のあなたは…こういう荒事とは縁もゆかりもないイメージだったけど。」

いや今だって。大した縁やゆかりはないですよ？ただ、ほら。

「ほら？」

…怖い世界、なんで。自分と…もう一人くらいは護れるようにしてきたくて。

「もう一人…それ…あたし？」

、はい！

「…『はい』がコンマ1秒遅い！出た『はい』が必要以上に大きい

！」

…。

「ファタリさんがよぎったんでしょ？」

…。

「凶星、ね。沈黙もまた答え。やっぱ正直ね、あなたって。」

…。

「かなわんな、先輩にゃ、って思った？…それが先輩の先輩たるゆえん。女性の解読化能力…嘘を嘘だと見抜く力は元々男性より高いのが一般的だけど。あなたはそれ以前の問題ね。」

先輩は笑った。…俺は黙っていた。先輩だっていつもより多弁で早口。ふと出た素の質問を、しまったと思ったんだろう。

「なんとか言いなさいよ。」バシ！

痛いっす。

「…優しいのよね、根本的に。例えば、ファタリさんとあたし、どちらかしか助けられないとしたら…どうするの？」

二人とも助けます。先輩が吹き出す。

「だめよ。質問聞いてた？どちらかしか助けられないとしたら、って言ったでしょ？」

二人とも、助けるんです。

「…だーかーら、」

二人とも助けます！絶対！だから、だからそんな悲しい質問…勘弁して下さい。

「ごめん…そうだったわね。塔では…まさにその通りのことをしてくれた。自分の命を懸けて。先月号の雑誌でも捨てるみたいに。あっさり。」

とん、と先輩の頭が俺の右腕に当たる。

「口で優しい事を言う人は沢山いる。けれど優しい行いを実行する人は少ない。あなたは…普段は浮世離れた宇宙人みたいな奴だけど、土壇場で優しさに、自分の命を使う。魚が泳ぐような…鳥が飛ぶような自然さで。」

なんて言っているや。…！先輩の指が、する、とまかった右袖をさかのぼり俺の二の腕の素肌をつたう。うっ！これ…なにフラグ？「…どうしてあたし、あなたを選ばなかったのかな。最初からあなたを好きになってれば、今頃…」

…それは俺の台詞！とは言えない。なんか…黙るパート多いな、今回。

「あたし…」

先輩…。ガリっ！痛っっ？引っかかれた！二の腕！ああっ！血が滲んでるっ！三本線に…！先輩？ちょ、なにするんすか！

「なんか、…イラっとして。」

清水家男子たるもの紳士たれを信条にはしてますが…終いにゃキレますよ！なんだよこの…アメの包み開けたらムチが飛び出すような展開。シヨックでけえよ、期待があっただけに。

「清水君は、その…どこが気に入ったの？…つまり、あたしの。」
え？ そんなこと…ご本人にっ？

「自分で言うのもなんだけど、あたしって…勝手にワガママで偉そうでしょ。あたしのイイトコって…どこ？」

…女の子が男の子にする質問ってどうしてこう、難しいんだ？

「思い込みも激しいし、こう！と思ったら突っ走って、極端な事して、みんなに迷惑かけて…」

…うーん。答えづれえっ。その通りなだけに。

「どうして清水君は、あたしみたいな…」

ストップ！ネガティブ！…えー、俺が先輩のどこを好きになったか、でしょ？それ言葉で説明しないとダメですか？

「どういうこと？」

…部分を好きになったわけじゃないので上手く言えないっす。気づいたら、そばに居たくて、離れ難くて…何故か？とか考えたことないんで。

「そんなことってあるの？カレーを好きな人は辛さが美味しいから

好きなわけでしょ？自分の好きなものを好きな理由を、説明できない？」

言い方を変えます。俺が先輩を好きなのは、先輩が…先輩だからです。

「…答えになってない。」

カレーを好きな人だって『あー、カレーって辛さが旨いから好きになろう！そうしよう！』なんて考えたり言ったりしないでしょ？匂いとか、のど越しとか、見た目とか、食べたら幸せになる感じとか…『あー、カレー好きだなあっ！』っていつの間にかなるのが普通なんじゃ？

「……。」

俺がカレーを好きなのはカレーの全てに幸せを感じるから。先輩を好きになったのは先輩の全てに、愛しさを感じるからです。『ツライ時、お風呂で泣く所』とか何かひとつの要素だけじゃ、先輩は成り立たないでしょ。

「…どうして知ってるの？ 誰にも言ったりしてないのに。」

なんとなく、分かりますよ。一時俺、先輩ばかり視て先輩のことばかり考えてたんですから。

「覗いたり…したわけじゃないよね？」

あのね。後輩の純情な感情を三等分して壊すようなこと言わないで下さい。

「それにしても清水君って船…戦艦に詳しいのね。」
どきっ！

「あたしもイージス艦って聞いたことぐらいはあるけど、重さや武器の性能まで把握してるって…ちょっと変。」

ま、そうだよな。今まで敢えて言わなかったんですけど、うちの父が…元・海上自衛官なんです。

「へえ！カッコイイ！」

いや、今は保険屋の営業事務ですよ。見た目も普通の中年のおっさんで。

「なんで黙ってたのよ？男の子なら自慢にしても良さそうなものじゃない？」

：昔、言われた事があって。お前の父ちゃん、毎日人殺しの訓練してるんだろって。

「え…。」

いやもちろんそうなんですけど、俺もちっちゃかったから…言った奴とガチで掴み合いのケンカして。それから…聞かれない限りは自分からは言わないんです。

「ごめん…。」

いやマジ謝罪やめて下さい。父は好きだし、その仕事も必要なもので、恥ずかしいとか悪だとか思いませんが。…軍事は人の死や戦争と切っても切れないですから。受け付けない人がいるのも、今は判るつもりです。

「…うん。」

それに父も国防だなんだより単なる船好きみたいなのがあったて。志高い立派な父ちゃんなんだよ！って強く主張もできなくて…この話題、微妙なんすよ。

「そっか。」

昼間はつい、生のイージス艦見てテンション上がってマニアックな事を口走りました。今後自重します。「でもいいんじゃない？あの影のウィンドウたちが知りたいのは、そういう情報なんですよ？」そうなんすよ。今後米軍について聞かれたらどんどん軍事オタクっぽい一面が露わに…。家庭の事情なんで、ひかないで下さいね。

「でもそういうの、クライじゃないんでしょう？お父さんが自衛官だからって、昼間の詳しさは…。」

どきっ！ええ、まあ…ってか父ちゃんが。そんな特集とか映画ばかり観るんですよ。で、あーだこーだと分かり易い解説をしてくれて…パッシブソナーって言うんでしょ？惜しい、「コーン」ってなのはアクティブソナー、みたいな会話が日常会話なお茶の間で育ちゃあ…ねえ。

「なんかあたし…知ってるようで、ちゃんとは知らなかったのね。清水君の事。」

どうでしょ？大概のどこ把握されてる感も無くはないですが。…そういう先輩のお父さんってお仕事なにされてるんですって？確か神社の管理だかなんだかしてると聞いて聞いたことある気が。

「…教えない。」

なぜえっ？先輩は悪戯っぽく笑った。

「教えない理由も教えない。」

なんだその秘密のデフレスパイラルは。こんなにやろう…後で言いたくなっても聞いてやるもんか！

こっちの世界でも、実は穴のあいた貨幣って珍しいんだよな。(前書き)

ついに到着した神秘の島、スウシャル・ドモス島。待たせたな！ここに米軍と古代神殿とウエルトウが？：なんかざっくり書くとほんと厨二な展開。再会して以来どこか態度がおかしいウインドウ。先輩はなんか不機嫌？ファムはいつものノリだが：俺を買いかぶり過ぎじゃないか？「首が取れたりしない限りは治したるさかい。ぶわーあつと行こうで！」：半繋がりなら治せる？ええい弱気な。作戦はいつものちを大事に！攻め三、守り七の気持ちいが合言葉！ひとりの体じゃないんだから、俺！！

こっちの世界でも、実は穴のあいた貨幣って珍しいんだよな。

翌朝船は目的の島に着いた。

西の果て、「黄昏の海原」と呼ばれる海域に浮かぶ神秘の島。スウシャル・ドモス島。どこかで見たな、こんなシーン。あ、あれだ。ジュラシックパーク2のオープニング。鬱蒼としたジャングル、切り立った崖、砂浜。ザ・孤島。：なんかなんでも「ザ・」って付くと急に百均みたいになるのな。結構でけえ島だなあ。あ、鳥が飛んでる。

港に入港：とかじゃなく沿岸に停泊して小舟に分乗し、上げれる海岸を目指す。漁民が怪しい連中を目撃したポイントから一つ隣の入り江に。なんかメンバー以外にもスタッフっぽい人七、八人が一緒に上陸し、ベースキャンプの設営を手伝ってくれる。船は最大15日停泊してくれて、その間、ベースキャンプにも数人のスタッフが常時詰めてくれるらしい。

ウインドウの話では神殿までは順調に行けば丸二日の距離らしいから：まあ、食われたり吞まれたりさえしなければ帰ってこれるだろう。問題は米軍か：訓練され統率された現代の歩兵部隊が相手じゃ：RPGキャラの一桁人数パーティーなんて、動くオモシロ標的みたいなもんだ。ウインドウのモーターアタックやファムの落雷、ラムだっちゃ姉さんの「10まんボルト」なら勝てるかもだけど：できたら正直、人間を殺すのは避けたいなあ。へり落としちゃったし、イージス艦一隻沈めちゃってるけど：これ以上は、ノーキルでクリアしたい。

テントの設営も終わり、一休みがてらご飯。みんなでご飯の時、ウインドウは腕組みして立ってる。

ウインドウ。お前、腹は減らないのか？

「減らないわ。」

「エネルギーとか要らない？」

「身体や意思は永久循環魔法で維持してる。」

「エイキウジュンカン魔法？」

「簡単に言うとエネルギーをぐるぐる巡らせ続けて…永遠にエネルギーを確保し続ける魔法。」

「エネルギー保存の法則に普通に反してね？」

「例えば水車。あれは水が高い所から低い所へ流れる力、落差水圧からエネルギーを取り出す仕掛け、よね。」

ああ、そうだな。

「基本は同じ。永久循環魔法はこの世界の事物の『有』と『無』の落差からエネルギーを取り出すの。」有と、無の落差…へえ。

「生まれたエネルギーの周囲にはエネルギー自体の有と無の落差が生まれる。そこからまたエネルギーを取り出す。エネルギーがエネルギーを生んで永久に循環する。それが永久循環魔法。塔やわたしの力の源。」

そんなことができるんだ。すげえな。

「ある程度文明が進めば、どの文明もたどり着くありふれた永久機関よ。あなたの世界でもいずれ発見されるでしょうね。魔法、とは呼ばれないかもしれないけれど。」

それでエネルギーは賄えるとしても、なんか食えるようになってたらしいのにな、お前も。

「なぜ？必要ないのに。」

いや一緒に飯食えるじゃん。

「……。」

てか立ってないで座れば？見張られてるみたいで落ち着かねえよ。

「…そうね。」

ウィンドウは俺の左隣に腰掛けた。珍しく素直だな。

「ン・ヒロ！」

ん？ああタチ君。どうした？…ファム、訳してくれない？

「…ごめん。フアタリさんまだいないのよ。今はあたし。」

あ、先輩か。フアムいらないと言葉がな…。ラムだっちゃ姉さんはちよっと離れたところでイケメン☆ヴァリーとなんか話し中みたいだし。

「昨日はすみません、失礼なことをして。僕、あなたに一度お会いしたいと思っていました、ですって。」

あウインドウ。ありがと。

「聞いてもいいですか？」

なに？

「どうやったらあなたのように強くなれますか？ですって。」

…俺、そんな強くないよ。

「大きなニアゴを一人で倒されたと聞きました。どんな訓練をされてるんですか？だそうよ。」

いや、歌われてるほどでかくはなかったんだ。実際はこの黒いお姉ちゃんが立ち上がったくらいの大きさで。

「ちよっと…人を魔獣の例えに使うのやめてくれない？」

戦ってる時もすげえ怖かったし。ギリギリ勝ったけど血まみれのロボロで…最後なんて崖から落ちる所をこっちのお姉ちゃんに助けられて、なんとか死なずに済んだんだよ。がっかりさせて悪いな。

「いえ、やはり思ったとおりの方です。僕はあなたのようにいたい。どうすれば、なれますか？ですって。」

俺のように？オススメしないけどなあ。改めてタチを見る。ガチガチに緊張してるみたいだ。船の人足だからそう高い身分ではないんだろうが、顔立ちも整ってて…なんつーか俺とかよりよっぽど賢そうだな。…なんて答えてやるのがタチ君の為になるんだろ？

…歌に歌われるような英雄になりたい？

「はい。」

俺もなろうと思ってなった訳じゃないから、どうしたら英雄になれるかは正直わかんないんだ。そもそも俺、自分が英雄だとはどうしなくても思えなくてさ。

「そんなことはありません！ヒロさんは英雄です！って言ってるけど？」

：好きな人や、仲間の為にできる事を頑張っただけだ。仲間の中にたまたま大袈裟な歌好きがいたんだよな。タチも好きな人や仲間を作って、その人達の為に一生懸命になればいいんじゃないか？少なくともその人達から見れば、そんなタチは英雄に見えると思う。逆にどんなに大勢の人達にもてはやされても、歌に歌われても、好きな人や仲間がいなかったら：虚しいし寂しいと思うよ。タチがこくこく頷く。

「これ、差し上げます。お守りです。」

差し出された小さな袋。開けていい？：お、銀色の：植物の種？

「マンタライスの種です。成長すると城のような大木になります。普通の種は茶色いんですけど何百個かに一個、そういう銀色の種ができるんです。」

へえ。

「銀色の種は幸運を呼ぶと言われています。幸運を祈っています。ですって。」

ありがとう、大事にするよ。あ、ちょっと待って。ごそごそ：あ、良かった。あった。五円玉。これやるよ。御礼だ。俺の世界のお金。「そんな、いただけません、って言ってるわ。」

いやそんな高い額のお金じゃないんだ。ただお金の名前の響きが、俺の世界の言葉で『いい人と出会って仲良くなる』って意味があるって。神様のお供え物とかによく使われるんだ。よその世界のお金なんて、こっちじゃ珍しいだろ？好きな女の子ができれば、紐通してペンダントにしてプレゼントしたらいいよ。

「異世界の勇者ヒロからもらった異世界の神の金貨。絶対に人にあげたりしません！」

：大袈裟だな。じゃあ二個やるよ。タチがこの人だ、と決めた相手とお揃いで首にかければ仲も深まるんじゃないか？

「ありがとうございます！そうさせて頂きます。」

「…その相手以外には、俺からそんなもん貰ったってのは秘密にしとけ。なんか俺、名前だけ変に有名になっちゃったみたいだから、盗られたりするかもよ。いい人と巡り会えることを祈ってるよ。」

「はい！ヒロさんも。ウェルトウを見つけて必ず神殿から帰って来て下さいね！ですって。」

ああ、また帰りの船でな、タチ。タチはまたパタパタと駆けて行った。

「…どういうつもり？」

なにが？

「あんな人足の子供にサービスしたって大していいことがあると思えないけど？」

そうか？幸運のお守り、貰ったぜ？

「まさか信じてるわけじゃないでしょうね？その種にはなんの力もない。植えれば芽は出るでしょうけど。色の違う、ただの種。」

でもあの子の俺を応援したいと思ってくれる気持ちは、本物だろ？

「……。」

それに俺が応えて、あの子がちょっとでもこれからの生き方に夢や希望が持てるようになるなら、さっきのやりとりには、すげー大きな意味があると思わないか？

「…あの子にとって？」

この世界にとって、さ。あの子がほんとに恋人や仲間を大事にして、あの子と関わる人達や先々あの子の子供たちにその気持ち伝わって、それぞれがまた恋人や仲間を大事にするようになれば…世界自体が少し、優しくなるんじゃないか？

「あなたの世界じゃないのに？」

大人の責任だよ。子供が、夢や希望を持てるようにしてやるのは。世界は関係ない。俺、瞳は中二だけどハタチ過ぎてるからな。不本意だけどなんかすっかり勇者だ英雄だってことになってるし。ファインサービスってわけじゃないが、俺のちょっとした愛想であの子にとっていい思い出ができるなら、やらない理由は逆にないぜ。

「…そういうものかしら。」

そういうもんさ。子供が夢や希望を持てなくなったら、それこそお先真っ暗だ。

「叶わなかったり、見せかけだったりしても？」

それでも、だ。最初に立てた目標に例えたどり着けなくても、そっちに向かって前進したなら意味がある。少なくともなにもせずじやんやりひっとところにいるより、ずっといい。

「…いずれにせよ一時のことだわ。」

そうだな、お前から見りゃそうかもな。俺たちの寿命は短い。でも死んだ後に、親しかった人の中にかけらが残る。俺の言った言葉や取った態度。それが相手に与えた影響が。そのかけらはその人の一部となって、また誰かの中に。世界に波紋のように拡がる。未来の誰かと、響きあいながら。なら生きてる内になるべくいいかけらを残しとかなないと。どんな世界でも、いつ死ぬか分からないからな。

「…あなたはいつもそこまで考えて、人と接してる？」

いやこう思うようになったのは実は最近の話で。どういうつもりか尋ねられたりしなけりゃ恥ずかしいからくどくど説明したりもしねえよ。にしても通訳サンキュな。お前も親切なところあるのな。助かったよ。

「それは…あなたが、困ってそうだったから。」

言葉もな、憶えなきやとは思ってるんだがなあ。…どしたんですか？先輩、じつと見て。

「…なんでもない。」

…？。なんか不機嫌？

「フアタリさんと代わるわ。戻って来たみたいだから。何かあったら呼んで。」

あ、はい。

「ヒロ！ごめんな、遅なって！お勤めはすぐ終わらしたんやけど、父上の説法がいつもよりえらい長くて。父上が後ろ向いた隙に女神像と入れ替わってきたわ。」

それは：どうかと思うぞ。

「ウェルトウ捜しは何より優先や！父上はウェルトウの大事さが分かってないねん。事情は全部説明したのに、断じてならん！なんて全宇宙の危機だったのにお経なんて読んどうる場合かつちゅうねん。ラム姉ちゃんも回復魔法使われへんし：。」

えっ！そうなの？　じゃ、なんでついて来たんだ？だっちゃん姉さんは。

「うち、必要やろ？　今回の探索にも！」

そうだな。回復魔法ナシの一発アウトはこの世界じゃ厳しい。お父さんには悪いが：。てかお前、身体が襦の間なら土壇場で急に連れ戻されたりしない？

「ふふん。うちもそんなにアホやない。ちょっとやさっとじゃ見つからんとこに隠れて瞑想に入ったさかい、そんなことにはならんわ。」

ちなみにどこに隠れたんだ？

「神殿の地下墓地。」

：怖っ！俺なら絶対イヤだ。

「うちかてイヤやけど、盲点やろ？横たわる人間を隠すには、横たわる人間の中、や。」

なるほど。道理ではある。けど何かあって身体に帰れなかったら、人知れず：他の横たわる人間の仲間入りだな。

「そんなことにもならん。ヒロがおるもん！ン・アベエも。ウェルトウの騎士と魔の森の主がおって上手く行かんわけあるかいな。」

買いかぶりすぎだ。そんなことにはならないように全力を尽くすが：俺だって死ぬときや死ぬぞ。

「そんなことにもならんわ。うちがおるもん。首が取れたり石になつたりしない限りは治したるさかい。ぶわあーつと行こうで。ぶわあーつと！」

：ポジティブだなあ。さらっと怖いこと言うなよ。即死したり生命活動が完全停止したりしない限りは大丈夫ってことね。肝に銘じと

きます。

アニメならサブタイに「もなみの〇〇大作戦!」とかつきそうだな。(前書き)

怪しい連中の偵察に出る俺。100人規模の仮設基地。潮風にたなびく星条旗! : 分かりやすいなあ。やっぱアメリカかあ :。ついにめだす先輩とウィンドウ。もう、今それどころじゃないじゃん! あいつらの目的もわかんないのに! え? 直接聞く? あいつらに? いや教えてくれるわけ : なに思いついたんですか先輩。危ないことじゃないでしょうね? : え? 本気? できるかな、俺。 : ヒロト、上手くやれよ?

アニメならサブタイに「もなみの〇〇大作戦！」とかつきそうだな。

昼食後の作戦ミーティング。神殿の位置は分かっているが、問題はやはり米軍だ。まずは米軍目撃ポイントに近づき、偵察して部隊の規模を確かめようということになった。確かに5人なのか500人なのかで対処は全然違う。意外に米以外の国籍の軍隊かもしれないし。どちらにしろ神殿には向かうが、米軍への態度を決めとかなないと、どっかでかちあって戦闘！とかいやだもんね…。

皆を少し離れた場所に残し、俺単独で目撃ポイントが見下ろせる高台に向かった。偵察の結果、やはり米軍とわかった。仮設基地まで設営してる。基地の規模から想定すると100人前後かな？駐留してるの。常時実働は一個小隊40名前後で交代要員やCICやバックアップにぎっくり60名前後？…結構な戦力だな。確か海兵隊は1班4名。…10班が常時交戦可能なわけか。半分を拠点防衛に回しても、なお5班20名は動かせる。何をする気だ？米軍。目的によっても脅威だぞ？

皆の所に戻り、見てきたことを報告。目的はウェルトウかも、という話に。その話の途中、また俺の影を巡って一悶着。今度はウィンドウと先輩が。…疲れるなあこのパーティー構成。

ウィンドウ。大体一緒にいるんだからさ、直接聴けばいいんだよね。その不思議だか興味だかの内容についてさ。今すぐはちよつと無理だけど、夕飯のあとにでも。質問考えといってくれ。

「ヒロ本人に、直接聞く？わたしが不思議に感じたことを？」

そうだよ。俺の影なんかこねくり回すより、余程手っ取り早い。違うか？

「……。」

ま、おいおいでいいぜ。先輩が俺の腕を引っ張る。

「そうよ！直接聞けばいいんじゃない？アメリカ兵に。なにしに来たのか。」

俺たちみたいな得体の知れない団体に『実はさあ、異世界転送アイテム探しに来たんだよね。』とか教えてくれなくないですか？逆に捕まって、変な注射されて、白目向いてヨダレ垂らしながら、知ってること全部しゃべらされたりしそう。

「そんなことしちゃうずい、味方にしたほうがいい相手だっと思わせればいいんでしょ？」

…何か策が？

「ウインドウさんの巨大牛ってすぐなれるんですか？」

「なれるわ。」

「あの状態の時、鉄砲や爆弾でダメージ受けますか？」

「物理攻撃はなんの効果もない。逆に魔法攻撃は、強い影響を受けるけど。」

「フアタリさんの落雷の直撃を受けたら？」

「結構深刻なダメージね。消えはしないと思けど、暫くはわたしとして機能できない。」

「じゃあ当てないようにしないと。フアタリさん、ヴァリーさんを手伝って貰えるか尋いて。アベさんとエレンさん、ラムさんにも…はいな。ン・ヴァリー！」

…なんだなんだ。なんの悪だくみ？イケメン☆ヴァリー、力強く頷いて。アベさんも無茶振りエレンも成る程、ってなりアクション？ラムだっちゃ姉さんが、フアムになんか言っってフアムが断ってるっぽい。

ちょ、フアム、先輩、何が始まるんですか？俺にも教えて下さいよ。隣でウインドウが溜息をついた。

「あなたの先輩、変な事思いつくのね。いいアイデアかもしれない。すぐく不本意だけど協力するわ。主役はあなたよ。上手くやって奴

らとの交渉、必ず成功させて。無事ウェルトウを回収する為に。」
：だから何を？ みんなもったいぶるなよう。俺にも事の次第を教えろっつ？

米海兵隊の異世界仮設基地の平野部に繋がるなだらかな丘陵地。亜熱帯っぽい樹木が覆う。

突如、ギアアギアアと鳴く鳥の群れが：結構な数だな。数十羽。メキメキバキバキと強い力が大木をへし折る音がそれに重なる。木の葉と土煙を巻き上げながら、小山のようなそれが身を起こす！

「んもおおおっ！」

真っ黒な身体、左右非対称に生える五本腕、三本の脚、天を突く二つの角！

相変わらず見事な牛っぷりだなウィンドウ。

地響きを立て、進行方向の何もかもをなぎ倒し異形の牛怪獣が米軍基地に近づく。響き渡るサイレンの音、何か叫びながらプレハブから駆け出す米兵たち。

タタン！

見張り台の兵が射撃を始めた。2輦の装甲車が動きだし、基地と巨大牛の間に入る。

トトトトツ？

装甲車の屋根のフタが開き、グラサンの兵隊が屋根据え付けの機関銃で巨大牛を撃つ。この距離だとジャラジャラ排出される空葉莢もみえる。

まんまB級ハリウッド映画。にしてもあんな相手でもすぐ撃つのな、米軍。流石だ。無理かも、とか逃げよう、とかないんだ。

タタンタタンタタン！ パパパパパン！

バラバラと駆け出してきた米兵たちがそれぞれの手持ちの武器で攻撃を始める。チカッと何か光ったと思ったら、シパッ！ 煙の尾と細いケーブルを一本牽いて対戦車ロケットが翔ぶ。巨大牛の頭部めがけて。バパンッ！ という音色は間抜けだが大音量と空気振動は身を

すくませるに十分。直撃された巨大牛、全く動ぜず前進をやめない。ついに森から出た巨大牛、天に向かってもう一度吼えた。

「もふうううつつ！」

装甲車がゆっくり後退する。兵士たちも「やばいんじゃないか？」みたいな雰囲気で撃ちながら下がる。みな少しずつ装甲車周りに集まりながら。ウィンドウが地面に拳を打ち付ける。地震のような揺れ。砕けた大地に大穴が開き、岩や石が飛び散り、辺りに降り注ぐ！海兵隊基地、大ピンチ！

…ピシャアアッ！

その時！巨大牛の目の前の地面に雷が落ちた！牛がたじろいだように後ずさりする。

ピイイッ！

俺は思い切り指笛を吹いた。それを合図に、俺を乗せたヴァリー・ザ・ケンタウロスが隠れていた茂みから駆け出す！ハイヨー！アグロ！アベさんとエレンは反対方向から飛び出し、海兵隊の兵士たちに下がって逃げるよう誘導する。

あ、以外に素直に逃げてるな…おわっ！速度上がると…え！ちょ！落ちそう！鞍もあぶみもないんだぞ？内股筋そんな強くないって！くう…根性！

逃げ遅れた装甲車に巨大牛がパンチを見舞うモーション！間を割って駆け込む俺と愛馬ヴァリー！落ちまいと必死なのを隠しつつ、パンチのタイミングに合わせて剣を振る！

「もあああっ！」

パンチ弾かれたし痛えっ！みたいなリアクションの牛。ウィンドウ、意外に演技派だな。おれは重ねて二回、三回、四回、五回と牛に向かって剣を素振りする。その度に「いてっ！」「ぐわっ！」「ぎゃっ！」「斬られたあっ！」と演技する牛。剣を高々と掲げ、ちよつと溜める。えい！つと垂直に振り下ろす剣の動くに合わせ、二発目の雷！

あれ？当たってね？ウィンドウのすぐ後ろに落ちる手はずだが…大

丈夫か？

「ふもおおおおおっつ！」

あれ演技だよな？ 苦しむ牛。滲んで：虚空に消えた。

「イエーツ！」 「フウーツ！」

米兵たちが歓声を上げる。メツチャ笑顔でガンガン腕突き上げて。隠れてたファムやラム姉さんも出て来て：俺中心に横一列でパーティーが並ぶ。

砂埃と陽炎の中、基地に向かってゆっくり歩く。

：あれだ。アルマゲドンの出発直前の採掘工たち。んー：なんか恥ずかしい。こんなベタな恩着せの勇者演出、上手く行くのか？

パタパタとカラス位のサイズの黒い首の長い鳥が一羽飛んで来て、俺の肩にとまった。

あ、よかった。ウィンドウ、無事だったか。雷、近かったように見えて心配してたんだ。

：鳥の姿のウィンドウが小声で答える。

「わたしもヒヤリとしたけどね。ファタリは上手くやってくれたわ。」

「

ちらつと隣を歩くファタリを見ると彼女は微笑んでウィンクした。ウィンドウが囁く。

「さあ背筋を伸ばしなさい勇者様。兵隊たちが見てる。顔はちょっと怒った顔に。少しだけ目を細めて：そう。そのまま。」

うう：顔がプルプルする。

「喋る時はゆっくり、低めの声でぼそぼそ喋るの。動作もね。一つ一つ、ちよっとゆっくり目に。ただものじゃない！ とはもう思われてるから、それを少し強調するだけでいい。予定外の事があっても慌てず、落ち着いて。」

分かった。やってみる。味方だし強いって事は示せたはずだ。後は上手く情報を聞き出して：なるべく穏便に帰って貰いたい。こんなんやったことないけど：先輩、頼りにしてます！

仮説基地のプレハブ。米兵に付き添われながら通された会議室っぽい部屋。折り畳みの事務机とパイプイス。座って待つこと数分：迷彩の戦闘服に揃いのキャップを被り、ノートパソコンとファイルを抱えたでかくて毛深い大男と、痩せて眼鏡の神経質そうな男が現れた。俺と先輩が立ち上がる。俺の肩に止まるカラスのウィンドウがばささ、と二、三度羽ばたいた。

切り出したのは先輩だった。

「Nice to meet you. My name is Fatarri, Priest in this universe. I have knowledge of your universe, a little.」

おおっ先輩。流石だ。国公立現役合格の実力。俺の白いマントを手直したローブに身を包み、海兵隊の責任者を向こうに回して物怖じしない：どころか最後にニコツと微笑んで小首かしげて見せる。向こうの二人も釣られて頬緩めてるし。女の人ってすげえな：味方にする頼もしいが敵に回すと、勝負する前に負けてる感じに：。

「He is our master Sir Hiro, Knight of Welltown.」

あわましたー？さー・ひろ？ 演出意図あつてのことなのは百も承知だが：いかん、笑いそうだ。シリアス顔が崩れる。ピクピク。黙って頷いとう。

先輩が考えたのはつまりこういう作戦だ。銃火器を受け付けない大怪獣ウィンドウを不思議な技でやつつける異世界の騎士ヒロを祭り上げて、協力と情報交換を持ちかける。大怪獣が再び現れる可能性があれば、米軍も俺たちをないがしろにできない。最終的には米軍の目標が知りたいが、そういう意図があることはまずは伏せて、知らん顔して協力します、情報を提供します、と持ちかけて：どんな協力や情報を欲しがるか、から彼らの目的を類推する。米軍はこっちを一段下の未開人と見てるだろうし、高度な文明の事は理解でき

ないと思っっているに違いない。油断してる所に現地人から協力の申し出があれば断わるまい。

「ヒロ、こちらはホワイトレイ大佐。今回の作戦の責任者。」
ヤセ眼鏡のほうが軽い敬礼をする。あ、そっちが隊長？

シュワちゃんっぽい方は背中を丸めてパソコンを打ってる。…キー
タッチ静かで異様にはええな。

大佐が英語でしゃべり始めると、大男が部屋の電気を落とす。
ホワイトボードにパワーポイントが投影される。

うお！半壊した校舎みたいな建物…なんだあの壊れ方。
サーティーワンのアイスとる奴で丸くくりぬいたみたい…。

先輩の同時通訳。

「今から22日前、ある実験をしていた施設が突如写真のような状況になった。6人の研究員、教授と準教授、2人の政府関係者を巻き込んで。」

画像が変わる。研究室の中…笑顔のロマンスグレーのおっさん。ハ
イネックの薄手のセーター着た。

その手に持つのは…ワイアド・ウェルトウ！

いかん！表情よ動くな！ツバ飲むの我慢！

「モロンゴ・インディアン・テリトリの遺跡から発見された『エルト』と呼ばれる遺物。カフイラ族の言葉で『鍵』という意味。彼らの伝承では高所に掲げたエルトに落雷した時、神の国への扉が開くと伝えられていた。実験とはエルトに実際に電流を流してみるというものだった。」

…ああ！やりそう！学者先生の好奇心無限大かよ！

「大学のLANに残されたタイムスケジュールから、恐らく流す電流を段階を追って強くしていく手続き中に事故が起きたと思われる。関係機関の調査と検討の結果、行方不明者と欠損した建造物はどこか別の世界に送られた可能性が高いと判断され、我々海兵隊を主幹とした捜索・救出作戦が立案された。」

あー…B級SFっぽい。

「構成物質の分析の為、別の大学に送られていたもうひとつのエルトを用い、充分な広さの某所で遠隔操作による同様の実験を行ったところ、ある電流量で直径約300フィートの『ゲート』が出現。強い風と共に大量の海水が流れ出し、実験は中断。」

海に繋がったのか。

「場所を変え、実験設備の高さを変え、船で行き来できる状態にゲートを安定させた。」

…なるほど。兵員や車両や装備、仮説基地の建材の輸送なんか考えたら船舶が通れた方がいいもんな。

「小規模の部隊を繰り返し派遣し、一部現地人の協力を得つつ前線基地と補給線を構築。本格的に行方不明者の捜索に取りかかろうと準備していた矢先に、哨戒中のイーリス艦が通信を断ち、警戒していたところにあの牛の怪物。正直、あなたがたが来なければ我々は壊滅していた。」

複雑…イーリス沈めたの俺たちだし…怪物も自作自演だしなあ…。

先輩が何かをさらさらとしやべる。

殆ど聞き取れないが…事前の打ち合わせ通りなら、情報提供と協力を申し出ているハズ。

「それはありがたい。我々は行方不明者の位置を携帯電話の位置情報信号から探知していたが、それも途切れて丸三日が経つ。」

また画像が変わる。地図？

「これは探知結果の推移を無人機で測量した地図に重ねたもの。彼らは島の中央、やや東寄りに留まっていたが、なにかの理由で島の中央まで移動したらしい。信号はそこで途切れている。」

神殿の近く…肩のクラス型ウィンドウをちらりと見ると、ウィンドウはくるる、と喉を鳴らした。

また先輩が何か言う。かぶりを振る大佐。

「別々に2つのチームを向かわせたが、森林地帯で消息を絶った。」
…むう。現地に誰か向かったのかを質問したんだな、先輩。

部屋の電気がつく。

「我々は何としても行方不明者を連れて帰りたい。サー・ヒロ、協力をお願いする。」

一呼吸置き、俺は黙ってゆっくりめに頷いた。

「感謝する。明朝6時に第三次救出チームが集合、出発する。チームと同行してアドバイスをお願いしたい。また、この世界特有の怪物が出現した際には戦闘のサポートも。」

もう一度頷く。

大佐が席を立つ。俺と先輩もそれにならった。

「こちらでもこういう習慣はあるかな？」

握手の手が差し出される。握手がこの世界にあるか俺もわかんねえけど、まあやっつけ。

がっちり大佐と握手。痛いくらいに。こちらも渾身の力で握り返す。

「では明日、その時間に。」

大佐とでかい秘書は敬礼して退出する。先輩はちよつと腰を落として優雅に挨拶した。

え！おれどうすりゃいい？えと、とりあえず会釈！

…うまく行った？なんとか乗り切ったっぽい。

プレハブを出る俺と先輩。

「御苦労様、清水君。何とかなったわね。」

今のところは…最後までボロ出さずに行けるかな？自信ねえっす。

「大丈夫。あたしがついてる。みんなも。あなたはあなたの思うように動いて。サポートするから。」

おねげえします。

「ヒロ、あいつらの話…どう思う？」

と肩のカラスのウィンドウ。

うーん、嘘をついてる感じはないなあ。画像とかも作ってないっぽい…恐らく兵隊たちへのブリーフィング用の資料だろうからあの辺は全部ほんとじゃないか？…ただ、なあ。

「ただ？」

国が：アメリカが大げさってか：本腰入れ過ぎな気はするんだよな。人的被害とか、すでに行方不明者の数を平気で上回ってるわけじゃん。あ、写真のあれ、ワイアドだろ？

「そうね。恐らく間違いない。過去にこっちから向こうへ持ち込まれたものでしょうね。」

それだって発動可能な予備があるわけだから：何十人って犠牲出しながら作戦継続する理由が：搜索打ち切り、作戦中止になっておかしくないと思うんだけど、なんでそうならないのか。

「まだ何か隠してることがある：と？」

わかんねえけどな、そりゃお互い様だし。

「確かにそうね。」

先輩も真剣な顔。うーん綺麗だな、先輩。相変わらず。

「：とりあえず様子を窺いながら協力しましょう。最初の予定通りに。幸いここまではうまく行ってる。変に欲を出して探りを入れたりして、ぶち壊しにはしたくない。」

：そうっすね。

「みんなのところに戻って報告と相談よ。それとご飯。：なんかお腹すいちゃった。」

俺もっす。ウインドウいつまでそうしてるんだ？

「あら、いけない？ここ、気に行ったわ。変身を彼らに見られるわけにはいかないでしょ？わたしの正体がばれたら、それこそぶち壊し。」

念のため確認だけど、あの行方不明者たちの場所って：。

「ええ。旧帝国の神殿そのものね。あそこには女神の泉がある。水を求めて移動したんじゃないかしら？」

なるほどな。森で消息を絶った救出チームは：。

「さあ？なにせ食欲旺盛な森らしいから。多分：。」

訓練受けたフル装備の海兵隊を食っちゃう森って：俺たち踏み込んで大丈夫なのか？

「頼りにしてるわ、罨と試練の専門家さん。」
えっ！！頼りが…俺っ！？俺になんかあつたら俺は誰を頼りやい
いんだよっ！！

なんか忙しいな。もしかして…人気者？（前書き）

敵に回せば恐ろしい米軍をだまぐらかし、取り入って仲間になることに成功した俺たち。夕焼けの孤島でひとときの休息。「ヒロ。」
どうしたエレン。え？剣の手合わせ？いいけど…ええっ？アベさん
も？ええと、そのあとウィンドウと語って、さらにそのあと先輩
と打ち合わせ？俺需要、赤マル急上昇？

なんか忙しいな。もしかして…人気者？

RPGっぽい異世界の米軍仮設基地なう。

というわけで現地協力者となった俺たち。

宿として基地のはずれの資材倉庫用の空きプレハブが一つ丸々借りられることになり、今晩はそこで寝ることになった。施設の敷地のすみっこで火を炊き、早目の夕飯。

夕焼けのドモス島は綺麗だ。赤ともオレンジとも違う夕焼けがいわし雲を照らし、海に反射して…絵葉書にして実家に送りたいくらいだ。前後のマイナス材料を無視して景色だけ見るとほんとリゾート地みたいだな。

夕飯は野菜や薫製の肉がゴロゴロ入ったスープみたいの。ラムだった姉さんと先輩が調理し煮込み中。飯食うごとに皆で分担した荷物は軽くなり楽になるが、手持ち食糧が減って行く不安は一抹増える。

「ヒロ。」

ああエレン。どうかした？

「食事の後、付き合ってくれないか？お前と一度、手合わせしたい、だそうよ。」

肩のウィンドウ・バードフォームが通訳する。

あサンキュ、ウィンドウ。

構わないけど、俺の剣の腕なんてしれてるから…一瞬で俺が負けて終わると思うが、それでも？

「構わないそうよ、勇者ヒロと手合わせしたって仲間に自慢したいらしいわ。」

アベさんが重ねてなんか言う。

「面白そうだな、俺もまぜてくれ。ヒロ、久しぶりに稽古をつけて

やる。本気でな、ですって。」

なにいつっ！練習とはいえ本気のアベさんと手合わせ？

：まあ、変な練習三年やるよりアベさんと一回手合わせするほうがずっと訓練効果はあるだろうが：恥ずかしい結果にならないようにがんばろ。

こちらこそ宜しく願います、アベさん。

あ、そうだ。ウィンドウ、お前とも話さなきゃな。俺の不思議について相手する約束だったもんな。

「え：ああ、そうね。」

お前が俺の影に尋ねようとしてた質問、まとまったか？

「ええと、：まあ大体は。」

まあ答えりゃ大層なこたあない、普通の答えばかりになりそうだな。な。

それより俺の普段の言動や出来事についてのリアクションを近くで見てもたぼうが、俺を理解しやすいかもな。

「：どうしてそう思うの？」

俺自身も、俺の事がよくわかってない部分があるからさ。説明しろと言われてもできないようなことがあるかも知れない。お前くらい賢いなら、くどくど質問や説明するよりお前自身の目で俺を観察して分析したほうが近道になるかもしれないねえな。

「：両方がいいわ。」

え？なに？

「両方よ。質問：話はさせて。あなたについて。並行して観察もさせてもらうから。」

ああ、そうだな。それくらいなら影を取られるよりずっといい。実用的に役立ってる心当たりはないが、愛着のある影だ。基本、一生もんだしな。やるのは惜しい。？

「：イッショウモン。死ぬまで使えるということね。誰の影だってそうよ。当たり前じゃない。」

わかってるよ。冗談だ。

ところでウィンドウ、鳥の姿で俺の肩にいるのが気に入ったのはわかったから、飯の時くらい一度降りてくれないか？多分、飯が食べづらい。

「そうね。ついでに近場をぐるっと偵察してくる。わたしもこの島のこと、地図と文献でしか知らないし。」

頼む。鳥撃ちの猟師なんてのはいないだろうが、場所が場所だ。気をつけてな。

「大丈夫。心配には及ばない。いざとなれば変化してどうにでもなる。魔術師なめちゃだめよ。」

なめちゃいないが：旧帝国が絡む島ってのがな。いまさらだけど前後の話から察するに旧帝国って高度な魔法を操る国家だったんじゃないのか？

「そうよ。旧帝国の魔法に比べたら今の魔法なんて路傍の見世物みたいなもの。」

やっぱり。だったら戦争とかも魔法がガンガン使われてたんだろ？魔法兵器とか魔法生物とかさ。

「詳しい記録は多くは残ってないけど、そうね。確かに魔法で動く機械や、魔法で生み出された生物は戦時に限らず利用されていたみたいね。」

じゃあこの島にも：例えば対魔法生物用の結界やら罠やら残ってる可能性もあるだろ？魔法を無力化するようなさ。用心に越したこたねえよ。

「ああ：確かにそうだわ。ウェルトウの神殿は重要な拠点だったはず。領空に結界くらいあってもおかしくないかもね。：そこまで考えなかった。魔力探知の術法を最大励起させておく。さすがは試練と罠の専門家。ありがとう、ヒロ。」

：やけに素直だな。俺別に試練と罠の専門家じゃねえし。ま、文字通りトリ越し苦労かもだけだな。

「え？なに？」

なんでもない。こっちのことだ。

「じゃ、行ってくるわ。わたしが必要になったら指笛を吹いて。多分聞き取れるから。」

ああ、行ってるっしょい。

ウィンドウは夕暮れの空に飛びたって行った。

丁度のタイミングで配膳が俺の番に。

「はい。清水君の分。ちょっと多目にしといたげる。今日は慣れないことがんばったから。ご褒美。」

あ、先輩。ありがとうございます。

「ちがう。もなみって呼ぶんでしょ？」

え！あ！そか…えと、もなみ…さん。

「さんはいらない！さあほら、あたしは誰？」

う…もなみ。…あああああっ照れくせえっ！

「よろしい。ね、あとでちよっという？今後のことなんだけど。打ち合わせしときたくて。」

あ、ちよっと遅くなってもいいです？夕飯の後、二、三先約が…。

「先約？誰の？」

エレンとアベさんと手合わせして、ウィンドウと話す約束に…。

「なんの？」

いや剣のですよ。どっちも俺より明らかに強いから、苦もなくひねられると思う…

「違う。ウィンドウさんよ。なんの話をするの？」

…いや日中、せんぱ
ギロリ

…もなみとウィンドウがもめた時、影やらないけど代わりに俺に質問していいって言っちゃったんで。その辺ちゃんとしとかないと、あいつなんだかんだ理由つけてホントにいつか俺の影持ってっちゃいそうだから。

「そう…わかった。じゃあ声かけて。ケース別に対応を確認しておいたほうがいいと思うの。アメリカの兵隊さんと一緒に動くなら、最低限起きそうなシチュエーションには対処できるようにしておか

ないと。」

ああ確かに。

せんば：

ギロリ

：すいません、一個いいですか？

「なに？」

名前だけ呼び捨てで他が丁寧語って不自然でしゃべりづらいっす。先輩呼びか、さん付けを認めてもらうか、呼び捨てを活かすなら：ためグチになっちゃうか。どれかになりませんか。

「じゃあ：ためグチね。」

わかった。じゃあそうさせてもらうよ。でも先輩として尊敬してるってのは変わらないから。

「よろしい。変に調子には乗らないように。」
へーい。

「で、なに？」

もなみは疲れてない？環境は異世界だし、海兵隊の猛者を束ねる大佐と渡り合って乗り切ったわけだが。

「大丈夫。なんだかんだ言って異世界初めてじゃないし。大佐だって別に：ああいふステレオタイプを地で行く理性的な相手は分かりやすいもの。判断基準や反応が予想しやすくて。」

じゃあ逆に感情的な人は苦手なんだ。

「んー：どちらかと言えばね。なんか思い付きや感情で動く人と一緒にいると、振り回される感じになって疲れたりする。」

うん。持ち上げようってんじゃないけど、もなみ自身が理知的な感じだもん。：俺とか割と感情と二人三脚で生きてるけど、もしかして一緒にいるのストレス？

「……」

え？ そうなの？ 黙っちゃうってことは！

「：そういうわけじゃないんだけど。」

：なにその弱ーいフォロー。やっぱ多かれ少なかれストレスなんだ

…。だから選ばれなかったんだなあ俺。そりゃしかたねえや。とほほほ…。

「なんか上手く説明できない。けど清水君が嫌いってわけじゃないのよ。ただその…つまり清水君じゃなくて…ああ、もう！この話はまた今度！あたしの中でも整理しとく！」

きちんと聞きたいような聞きたくないような。好きになった人が俺をストレスに感じるという整理された話。…飯食お。

ずずずっ…う熱っ！えほっうえほっ？ げほっほ！うえほっ！むせまくる俺。

「ウイオ オトウ リヒユウ、テイクニグ・ウエルトウ。エブルクオ…バルディア。」？

アベさんがそう言うのと、俺ともなみ以外の仲間が笑った。

多分「落ち着けウエルトウの騎士。がつつくからだ、馬鹿だな。」みたいなことと思われる。俺ともなみも顔を見合わせて笑った。

V S エレン ナンシュタト ラウンド1！ ファイツ？ (前書き)

無茶ぶりの騎士エレンとの練習仕合。いや勝てないっすよ。…まとも
に戦えばね。みたところエレンは余裕で勝つつもりで完全に俺を下
に見てる。そこにチラつく微かな勝機。ダメ元の…自分より強い相
手との戦いの回数なら、きっとエレンにも負けてない！オタク学生
にはオタク学生の戦い方があるってところを見せてやる？

VS エレンナンシュタト ラウンド1! ファイツ?

RPGっぽい異世界なう。暗くなり始めた仮宿：プレハブのそば、焚き火の近く。

キルトっぽい生地 of 鎧下姿で剣を手に対峙するエレンと俺。エレンがふわっと柔らかく二刀を構える。左右に均等に開いた二つの刃。ゆるゆると開き、上がり、殺気を含んでそり立つ。同時に足はじりじりと前後ににじり開き、腰は落ち、あらゆるアクションに備える。

「ワイアン・エティメ。テイクニグ・ウェルトウ。」

普段は人懐こい無茶ぶりの騎士が不敵に笑う。

「いつでもこい、ウェルトウの騎士。：だそうよ。」?

アベさんの肩の鳥ウィンドウが通訳する。

静かに降りる夜の帳：揺らめく炎が俺とエレンを照らし出す。

約束通りエレンとの練習仕合い。昼間はああ言ったけど、俺も男の子だからな。ぶっちゃけどうせなら負けたくない。アベさんも見てるし。とは言え残念ながらまともな剣の腕なら絶対エレンに勝てない。見た感じ気のいいお兄さんだが、その実、腕一本折りながら一人でクマゴリ倒す豪傑だ。だから「剣以外の勝負」に持ち込もうと思う。イチかバチかになるが：なに、負けて元々。なおかつ負けても死ぬわけじゃないし。

二刀流の有利なところは二つの武器で分業が可能な所だ。エレンの場合、左手の小太刀は防御的役割だろう。対する俺は剣一本。迂闊に斬り込めば小太刀で受けられ、ほぼ同時に右の長刀でフィニッシュされる。盾と違い、剣撃の応酬の中で逆の使い方：長刀で受けて小太刀で斬ることも当然できる。攻めては二箇所同時に斬りつけることで傷を負わせる確率を倍にすることができし、相手が防御に

躊躇すれば一気に二箇所を斬れる。そうならば実戦ならもう、ほぼ勝負が着く。対人刀剣戦闘では先に手傷を負わせた側が圧倒的に有利だからだ。痛みで動きは鈍り、集中力は削がれる。そんな中、元気な敵から二撃目三撃目が来るのだ。まず勝てるわけがない。…じやあ二刀流の不利な点は？片手一本で一つの刀を操っている所だ。まともに全力で斬り結べば、両手剣の一撃の重さを受け切れない。恐らくエレンは受け流す動きで俺の打ち込みを反らす戦い方をするハズ。片手で重い刀をデリケートにコントロールして初めて完全に優位に立てる…二刀流は熟練を要するのだ。そんな流儀のエレンは、俺の剣の気配や動きに全神経を集中し…一手二手三手、先を読んで来るだろう。そこを、はずす。

俺はエレンに斬り込む。

工夫なく、まともに。

予想通り俺の剣を小太刀で受け、流すエレン。

間髪入れず横一文字に閃く長刀の一撃！

だが予想していた俺は飛びのいて躲す。

二撃目。右から左に切り返すフェイントを入れて勝負手を思わせる強烈な一撃を！

エレンは長刀で弾き、小太刀で突いて来た！

これも想定内。攻撃直後から守りに転じていた俺が引いた剣が小太刀を巻き込むように弾く！

互いに半歩飛びのき取る間合い。

未だ一足一刀の距離。

ふふん、と笑うエレン。手詰まりだろう、とその表情が語る。次はやけっぱちの一撃か？と。

エレンと最後に別れた時…魔の森でクマゴリの群れと戦っていた頃の俺なら、そうしてただろう。だから、次の俺の一手はエレンの意表を突けるハズだ！

構えを変える。

立ち位置はさりげなく予定の場所に來れた。焚き火のそば。近すぎず遠すぎず。

胸元に引いた剣を垂直に立てる。

同時に歩法・柳葉の予備運動。

エレンには見せたことない技。

剣のツカを…ねじる。

焚き火の火の光が、剣身に跳ね返ってエレンの顔を照らす！

思わず目を細めるエレン！

今だっ！

剣をその場でぽんと軽く投げ手放す！

同時に柳葉発動！エレンの死角に滑り込む！

エレンの視線は、宙にふわっと舞った剣を追っている！？

とすつ、と地面に落ちる俺の剣！

俺を見失った事に気付くエレン！

遅い！

俺はエレンの背後からおぶさるように飛びつく！

がむしやらに腕をエレンの首に回す！

いわゆるスリーパーホールドの態勢に！

よし！取った？

何が起こったか分からないまま、おれを振りほどこうと暴れるエレン！

離すもんかあっつ！

離したら俺の負けだもんっつ？

「ウ…ク…」

苦しそうにうめき、片膝を折るエレン。

その時、アベさんが短く叫んだ！

「アロウブ！」

「それまで！」

ウィンドウの言葉に腕を解き、エレンの背から離れる俺。

苦しげに咳混むエレン。

ああゴメン！なんかムキになっちゃった！平気？

エレンを氣遣って背中をさする。

ウィンドウ、伝えてくれ。

やり過ぎてすまない、本気でやらないととても敵わないから…大丈夫か？って。

赤い目で笑って見せるエレン。

「勝負だから本気でやるのは当たり前だ。気にするな。俺は正直ヒロをなめてかかっていた。謝るのはこっちだ。今のが実戦なら俺は死んでいた。完敗だ…ですって。」

いや…実戦なら鎧があるからこうはいかないよ。若干以上に卑怯でごめんね。でもこういう戦い方の俺みたいな奴も世の中にはいるのよ。そのつもりもどっかに持っていないと。ずるい！っていう前にやられちゃったりするかもだから。エレンにはそんなやられ方してほしくないんだ。

ウィンドウ通訳中。

エレンの手を引いて立ち上がるのを助ける。

「仲間に伝えよう。勇者ヒロの強さは本物だった。かのウェルトウの騎士は不思議な技を操る。剣が光ったと思ったら姿が消え、次の瞬間、背中を取られて負けた、と。」

うーん。卑怯にずるを乗つけたような技なんだが…。まあそう言いたいならどうぞ。

アベさんが何か言う。

「初めからああするつもりだったのか？って聞いてるわ。」

…はい。正直まともに戦ったら絶対勝てないので。

「最初に二回斬り結んだのは？」

剣に、より注意が向くようにです。攻めると見せかけて防御的な氣持ちで打ち込みました。

「立つ場所も考えてた？」

そうしないと反射で目眩ましができないし。俺のあの柳葉…いや、

膝を揺らすフェイント。人間相手に使うの初めてで。上手く行くか分からなかったから。なるべく惑わせる要素を盛り込んどこうかなと。

「以前一人で練習してるのは見たが…いつ身につけた？」
そっか。よく考えてみりゃアベさんに見せるのも初めてか。

：フアタリがクマゴリにさらわれて俺一人助けに行った時っす。身につけた…ってかヘロヘロになってたままできちゃったんですが。「それにしても剣を捨てるとは…思い切ったな。二刀の相手に丸腰になるんだぞ。怖くはなかったのか？」
そりゃ心細いけど…。

騎士の人達って剣にこだわり持ってるでしょ？立会い中に剣を捨てるとかまず思いつかないんじゃないですか？剣がギラッとしてフワッと上に動けば自然に眼で追う…注意が削がれたところに膝揺らしかませば、付け焼刃でも上手く行くかな？と。
無茶だからこそ、効果的な囷になるかなあ、なんてやってみました。
エレンがふうん、と鼻を鳴らした。

「大したものだ。ヒロ。刀の腕だけならエレンが上だろうが、ヒロは相手の強さと自分の弱さを認めた上で、知恵と勇気で勝利を掴んだ。相手が強くても負けられない戦いをすることもある我々騎士は、かくありたいものだな。」

おお。アベさんにガッツリ褒められた。へへへ。いや嬉しいな。
単に知恵と勇気しか勝負できる要素がなかっただけけど。

「次は俺が相手だ。稽古がてら腕前を見ようかと軽く考えていたが…今のヒロとそんな気持ちで戦っては足元を掬われそうだ。強敵と見て、本気で立ち会おう。」

…ええええっ！？

いや、なめてかかって下さいよっ！

本気のアベさんにとくべきだったか？

柳葉・焰^{ほむら}は！

V S アベンスグストウス ラウンド2! ファイツ? (前書き)

剣術稽古の練習試合二試合目。相手はアベさん。生半可な小細工は通じねえな、きつと。ここは負けて元々、今の俺の持てる力…全力を見てもらおう。臆さず戦います! 行きますよ! アベさんっ?

VSアベンスグストウス ラウンド2！ファイツ？

RPGっぽい異世界なう。

剣を正眼：切っ先が眼の高さになるように構える。その先に右手に剣を持ち、すっと立つアベさん。構えは取っていない。が：なんだろう、この「斬りかかれない感」。何をしても即座に対処されそうな：気負い過ぎ？

「レッヒ・エウオズ。」

「はじめよう、ですって。」

だらん、と下がるアベさんの剣。距離は6メートルってところ。ひと駆けして飛び込めば剣の射程だが、少し遠い。ふう：。落ち着け。中距離からの駆け込み斬撃なんかが通じる相手じゃない。間合いを、詰めよう。その前に。

うおおおおうつ？

剣を構えたまま叫ぶ。

正しく発する気合いは、それだけで勝負を決めることもある。

もちろんアベさんはそんな甘くはないが、臆さず戦います！って宣言みたいなもの。

厳しい表情のアベさんの頬が少し緩んだ。

俺は焚き火を背負うように左に回り込みながらアベさんとの間合いを斜め移動で詰める。アベさんはこっちの出方を見るつもりか、体の向きを自然に変えるだけで間合いを取り直したりはしない。剣はだらりと下がったまま。身のこなしも：普段その辺を歩く時とそんなに変わらない。

俺はと言えば：手にも足にも力が勝手に入り、太ももと二の腕のあたりがなんかしびれたみたいになって。自分の体じゃないみたいだ。ふう：もう一度息を吐き、肩を軽く回す。

距離は4メートル弱。ここからはじわじわジリジリ間合いを詰める。

一足一刀。

もう剣は届く。でもそれじゃ十分じゃない。体重を掛けた威力のある斬撃を相手に浴びせるには体当たりするくらいの間合いと勢いがある。どうだろ。あと…1センチ…！

今？ 地を蹴ってアベさんに向かって飛び込む！

剣を正眼から上段へ。防御は捨てる！振り降ろしの方が剣の足が速い。なんだかんだで俺のが若い。警戒されてるだろう小細工も抜き！初速で勝負！真っ向！唐竹割りいっつ？

シュルルッ！

うわっ？ 躲され…いや、いなされた？？

くる、と身を躲すアベさんとすれ違う俺！

なんだ今の音！剣を剣で受けてなんであんな音がするんだ？？

踵を返してもう一度！

下段斜め後ろに剣を構え、自分の体で剣を隠したままアベさんに駆け込む！体ごと両腕を回す！大振りで軌道は読まれるだろうが、どうせ何したって読まれる。なら勢いと渾身の力で受けた防御をはじき飛ばせ！

でやあっつ！

スラーンッ！

俺は見た！アベさんの剣先が俺の剣先に触れるやいなや、エスコートするようにピッタリくっついて…磁石にでもなってるのか？…なめらかに行く先を変えてリリースした！そしてまたアベさんはくる、と小さく身を翻して俺本体を躲す。

…遊ばれてる。円弧流水の剣、か。それなら！

俺は一旦距離を取り直す。息を一つついて、肩の力を抜く。くるんと手首で一回、剣を回す。…よし、回る。夜の甲板での練習を、今ぞ活かす時！

ふっ！

たたっと短いツーステップで間合いを詰める。

そのままボックスを踏むように足をクロスし、身を回す！足首、膝、腰、肩、肘、手首：足から連なる全ての関節を柔らかく回し、俺自身が一つの渦になるようなイメージ：回転に回転を重ね、俺の剣はサイクロイドやクロソイドの曲線を伴った連撃を生む！流剣！つむじ風・朧？

アベさんの剣が初めて上がる。

キン！

ガギン！

二撃目まではまともに防御したアベさん。だが三撃目からは！

アベさん本人の動きも円と曲線になり始めた！柔らかい：そして速い？

俺の連撃に巧みにタイミングを合わせ弾き飛ばしつつ、ふっと空いたスペースに鋭い攻撃を差し込んで来る！あぶっ！うおっ！

防御に追われ、俺の回転のリズムが狂う。増える隙とアベさんからの攻撃。ますます狂うリズム！：ダメだ！支え切れん？

下からすくい上げるようなアベさんの一撃を、全力打ち下ろしで弾いて、俺は飛びずさる。

はあ、はあ、はあ、んぐ！

強えええ！アベさん！やっぱ小細工全開で戦うべきだった？いや：何を今更。えーい弱気な！

？：アベさんの動きが！

あれは：ゆらあゝ：元祖！歩法！柳葉？

いかん！仕掛けが分かっても目で追ってしまっ！このままじゃ思うツボ！迷ってる暇はない？

俺は体を半身に、剣を片手上段に構えると：眼を閉じた。心眼なんて勿論無い。柳葉の動きは相手の視線を誘導し、欺く所に奥義がある。ならミスリードの動きを見ずに：足捌きの音に集中すれば。

ざざざ：ざざざ：ズザッ！

後ろ？

俺は背中に剣を回した！

王の間で見たキムタク防御！

キィィン！

びっくりするほど澄んだ音色が響き渡る！？

剣は使えない！俺はダメ元で低い回し蹴りを放つ！飛びのくアベさん！

俺は剣を両手持ちに構え直し、アベさんに向き直る。

アベさんの雰囲気が変わる。

何かする気だ…あの構え！

クマゴリ殺しの瞬剣！迅雷？

って俺相手に？

しかも！ゆらあゝって…それ試練の王にかました最強コンボじゃないっすか！俺を過大評価し過ぎ？

むう！さすがに迅雷相手に眼はつぶれない！

ならば俺も？

ゆらあゝ…そして剣を中段水平に構える。柳葉VS柳葉。本家アベさんにどこまで通じるかわからんが、突撃の狙いが少しでもそれれば。

迅雷は神速の捨て身突き。攻撃速度は恐ろしいが、性質上攻撃は一直線。途中で軌道も大きくは変えられない。腰だめの構えからは低い位置しか狙えない。

コンボ発動の瞬間、全速で後退して相対速度を遅くし、水平の構えから下回しに全力でアベさんの剣を弾く！…イメージで。

一回しか見たことないが、キムタク相手に一緒に飛び出したタイミングは忘れてない！恐らくアベさんを見失うと同時に、全力でさっき言った回避運動に入れば！

アベさんの膝揺らしの予備動作…いつもより長い。いや、そう感じるだけか？

その時！アベさんの姿がふわっと滲むように宙に消えた！

今？

アベさんは勿論、その剣も見えない！だけど突っ込んで来てるんだ！弾いて防げ？？

ジャリイーンッ！

突き出されたアベさんの剣を俺の剣が薙ぎ払うように弾いた！

やった！防いだ！アベさんの超必殺？

だがそこまでだった。剣を弾かれるに任せ、アベさんはそのまま肩から俺に体当たりを敢行した！

後ろに飛びのきながらの俺に体勢を立て直せる筈もない。

体当たりをまともにくらった俺は地面にひっ倒れて、したたかに背中を打った。

げへあっ！

身を起こそうと顔を上げると、そこにアベさんの切っ先が。

エレンが短く叫ぶ。

「アロウブ！」

「それまで！」

はあっ、はあっ、はあ…ふうっ。うう…参りました。

やっぱ敵わんな、アベさんにや。

アベさんに助け起され、剣を鞘に納めて礼。鎧やズボンの砂埃を払う。アベさんが近づいて来る。その肩に鳥ウインドウ。

…ありがとうございます。勉強になりました。

「いや、勉強になったのはこっちだ。膝揺らしからの捨て身の突き…躲されるとは思わなかった。滅多に使わないんだが…生身の人間で躲したのはヒロ、お前が初めてだ。…ですって。」

その王の時に一度見てたし…アベさん手加減してたでしょ？実戦なら俺、完璧に串刺しでしたよ。

「あれを躲して満足したな？その後を考えてなかったろ？」

…はい。

「下がって躲す…では弱気だな。さっきのように追い討ちに対処できん。相討ち覚悟で前に出て俺の間合いを潰す気持ちで、逆に斬り込んでいれば、勝ってたのはヒロだったかも知れないぞ。」

そこまでの覚悟がなかったです。咄嗟に躲す事で頭一杯に…まだまだですね。

「円弧の剣…あれは誰に習った？いつ？」

いや、見よう見真似で。ほらウルハアの手下の骸骨軍団と戦った時。以前アベさんが斧で戦ってるのを見たことあったからそれを参考に。

「あの時より動きも大きく、体全体を使っていて…動き自体がのびのびしていたようだ？」

…ちよつとだけ練習しました。みんなが寝た後。船の甲板で。

「大した奴だ、ヒロ。向こうに帰すのが惜しくなる。お前の剣の腕は俺の想像以上だった。お前の剣は『考える剣』だな。力が強いとは言えないが、変化や工夫があつて手ごわい。お前はお前自身が思っているよりずっと騎士に向いてるぞ。騎士は戦って勝てばいいだけじゃない。どうすることが一番いいことなのか、常に考えて剣を振るわなければならない。お前はすでにそれができている。十分に。」

え！いや！あ…えと、それほどでも。ごによごによ。

「謙遜するな。胸を張れウェルトウの騎士。観客が見てる。大袈裟にしなくていいが、手ぐらい振ってやれ。…だそうよ。」

そういうとアベさん、ぽんつと俺の背中を叩いてウインクした。

観客…？

でっ！いつの間にか結構な数の米兵が取り巻いてんじゃん！なに？見てたのこの人たち！三十人ぐらいいる？暇なの？仕事しろよ！海兵隊！おお！拍手と歓声と口笛と…なんかスラングっぽい野次、ありがとう。小さく手を振って応える。あ！あそこにこっそり先輩も混じってる！負けて倒されたところだけ見られたっばい！エレンには勝ったのにそこは見てないな…。ま、こういうもんよな。とほほほ。

夜の渚にこれほど似合わないカップルも珍しい（前書き）

エレンとアベさんとの練習試合を終え、ギャラリーアーミーとの戯れをこなし、ヘトヘトの俺。えーと、あとなんだっけ？あ、そだ。ウィンドウの俺研究に協力するんだった。待たせたなウィンドウ。「ちょっと海の方に行かない？」ああそうだな。俺もなんかひと気のないところ行ってえや。

この時の俺は知る由もなかった。まさかウィンドウが…。余りに意外なその行動とは？

夜の渚にこれほど似合わないカップルも珍しい

RPGっぽい異世界なう。

なんだかそのまま米兵にかこまれて肩叩かれたり写真取られたり：こらこら。コミコンとかのコスプレイヤーじゃないぞ。一応騎士資格持ってるこの世界の公務員だぞ。良く言えばフレンドリー。悪く言えば激・馴れ馴れしい。って言ってるそばからパシヤッ！って。せめて一言断わってから撮ってよ！もう！

「清水君。」

米兵の人だかりを掻き分けて、ひょこっと顔出したのは…。

あ、せん…もなみ。

「先に宿舎に戻ってるね。一通り落ち着いたら声かけて。起きとくつもりだけど…もし寝てたら起こしていいから。」

わかった。寝てていいよ。色々あってもなみも疲れたろ？…ファムは？一緒？

「それが戻って来ないのよ。向こうで何かあったのかもしれない。…親父さんに見つかったのかもな。だとしたら道中、より慎重にならないと。最悪、回復魔法はアテにできなかつたり…。」

「まあどちらにしろ今すぐどうできないし…打合せの内容、考えとくから用が済んだら宿舎で、ね。」

わかった。

「ヒロ。」

あ、エレンとアベさん。

「エウー・エプスル。ドゥーグニグテ。」

ばささ、と鳥ウインドウがエレンの肩から俺の肩へ。

ウインドウが耳元で囁く。

「先に休むぞ、お休み…って言ってる。」

ああ、ドゥーグニグテ！

…こっちが「お休み」だよな。

その後も米兵たちに三十分余り絡まれ続け…剣貸してくれとか振って見てくれとか肩組んで写真とってくれとか…最後の三人が揃って宿舎に戻って行く頃には、俺はなんかもうヘトヘトだった。あー…しんどい。大体エレン、アベさんと連戦しただけで既に体のあちこち痛い。特に剣を振った腕。試合中や直後はアドレナリン出てたためか平気だったが…落ち着くにつれて早くも筋肉痛のプロローグ。んでそこから更に英語話すムサくてゴツいあんちゃん達に囲まれてあーだこーだ言われた日にゃ…熱出して寝込みそうだ。はああ…。

「やっと解放されたわね。」

…ああウインドウ。待たせた。お前と質疑応答だったよな。

「ちよつと海の方に行かない？元の姿で話したいわ。」

ああ構わない。俺もなんか人けのないところ行きてえや。

鳥ウインドウ、答えのつもりか、くええっと一鳴きした。

夜の渚なんていつ以来だろ？

基地から二三分も歩くと狭い湾に面した三日月型の砂浜に出た。二つの月が雲から顔を出し、海面をきらきらと照らす。ウインドウは既に魔術師シルエットになってるが…夜のこいつはカモフラージュ率高い。雲の加減でいないみたいになる。

波打ち際をちよつと歩き、俺は適当な所で腰を降ろした。

ふいー…くたびれた。

このまま大の字になって寝ちやいたい。

ふわっと頬を撫でる夜の潮風が心地いい。

ウインドウも隣に腰を降ろす。

なんか…変な感じ。

携帯見ると時間は八時前。

まだこんなもんなのか。

あ、そういやウインドウって眠ったりするの？

「部分的にね。システムや記憶のメンテナンスの為の機能休止を、わたしの内面の部分部分で順番にやってるわ。人間みたいに横になって眠ったりはしない。」

へえ。合理的だな。人間もそんなならずっと起きておけるのに。

変身は？何パターン位できるんだ？

「パターンはそんなに多くない。すぐなれるのは二十種類位ね。主にこの世界の生き物や魔物だけど。」

馬みたいなのとか…魚とかもパターンにある？

「なれるわよ。ウェルトウに起こる不測の事態に、基本的にわたし一人で対処できるように移動手段や戦闘手段としていろんな姿になれるスペックをもらってるの。」

すぐになれるのは…ってことは変身パターンって後から増やしたりできるの？

「できるわ。わたしが立体として大きさや凹凸の具合を近くで見て把握したものなら。例えば…」

ウィンドウは、わわっと滲むと再びはつきり像を結ぶ。その形は…俺だ！鎧や髪 느낌まで！

色は真っ黒だけどまさしく俺！

またわわっと滲んで元に戻るウィンドウ。

すげえな。無生物…例えば机とか椅子とかにも？

「なれる。まあよっぽどのがない限りなりたいとは思わないけど。」

そう言うウィンドウ…微妙だけど、笑った？

影ってのも悪くないな。まさに変幻自在。魔法も使えて永遠の命があつて…お前自身も、お前の本体の魔術師もほんとにすげえなあ。ほとんど神様じゃん。

「…そんな…いいものじゃないわ。やってる本人からすれば。」

今の仕事…管理人の立場…イヤなのか？

「管理人の立場は嫌ではないわ。それがわたしの存在理由だから。ただ最近…ちょっと色々思う所があつて。」

まあそうだろうな。影だ管理人だつってもハッキリ人格…心があ
るんだ。モヤモヤすることもあるわな。

「…ええ、まあ…そうね。そのとおりだわ。…所でそろそろ質問し
てもいいかしら？なんかあなたばかり質問してるみたいだけど。」
ああわりい。なんかウィンドウって滅多に会えないタイプの存在だ
から、なんかこの際聴いとかなきゃってなるんだよ。

でもお前から見りゃ俺がそうなんだよなあ。そう思うと妙なもんだ。

「ほんとね…世にも珍しい珍種同士。よくも出会ったものね。」
ちよつと待て！俺はそこまで物珍しい珍種じゃないぞ。むしろクラ
スに一人くらいは居るタイプだ。

「あなた以外は口を揃えてあなたのことを普通じゃないって言うて
るように思うけど？」

普通のおっさんおばさんの子供で、成績は中の中のド平均。SFや
ファンタジーやオカルトや兵器軍事にチョッピリうるさい文化系オ
タク青年としては、ごく普通だ。

「…なんか面倒臭いから普通ってことでいいわ。」

こらそこ！面倒臭がるな！俺の主張が通った感が全くないだろ。
くすくす…って。

なんかウィンドウ…最近よく笑うようになった？

「だっておかしくて。ね、教えてヒロ。あなた、誰かを好きになっ
た時…どうなるの？」

で…？どんな質問だそりゃ？

うー…でも、まあ、答える約束か。

そうだな…。好きになると、というか、まず「なっちゃう状態」が
先にあって、段々「あ、俺…この子のこと好きなんだ。」って自覚
する感じだな。大体。

「…よく分からない。どういうこと？」

んー…場合にもよるが、大抵まず用もないのに目が追っちゃうんだ
な、その子のことを。

「うん。それで？」

その子としたほんの少しの些細な会話の内容とかをいつまでも鮮明に憶えてたり、挨拶の時ちょっとニコっとかされただけで胸がざわついたり。

「ふんふん。」

すれ違う度に振り返ってみたり、その子が別の奴と楽しげに話しかしてるとスゲー内容が気になったり。

「…そこで好きだ、と気付くのね？」

いや。この段階ではまだ自分で否定するんだ。なんかわかんねーけど。違う、そうじゃない、好きなんじゃない、恋じゃない…って。

「どうして？」

さあ？勘違いだったらお互い妙な感じになるからかなあ？恋愛の成功体験がないから、辛い目見るのを本能的に回避しようとしてるのかも。

「…なるほどね。それで？」

で…寝る時とかにその子のこととか考え始めて…挙句起きてる時もその子のことばかり考え始めて…自分で自分に言い逃れできなくなっただけ観念する。

ああ、俺はあの子のことが好きなんだ…って。

「…手間暇かかるのね。」

ほっといてくれ。

そうじゃない奴もいるんだろうけど、俺の場合はな。

「…で？」

そうになったら告白するよ。もう。タイミングと手段の検討に入る。

「へえ！好きを自覚するまでに時間掛かるのに自覚したらすぐ行動するのね。」

初恋がな…気持ち伝えないまま向こうに恋人ができて投了でさ。もんっすごモヤモヤが残ったから。気持ちを自覚したらダメだろうがなんだろうが伝えるんだ。振られりゃ諦めもつくが…何もしないうちに終わった恋の悔しさと言ったら…のたうちまわる程だからな。誇張抜きに。

「その…初恋の相手がもなみ？」

…ああ。

「告白した相手が…フアタリ、ね。」

そうだな。そうなるな。

「……。」

どした？

「いえ、なんでもないわ。人を好きになって…失恋だ告白だってな
ったのはその二人だけ？」

なんのインタビューだよ、そりゃ。

ん、まあ小坊中坊の時も好きな子ってのはいたし、大学入ってから
もかわいいなと思う子はいたが身悶えするほど好きになったり、残
り一生棒に振ってもいいやって思ったのはその二人だけかな？

「…そう。そうよね。」

なんかトーン暗いな。どした？ウインドウ。大丈夫か？

「ええ…大丈夫。ねえヒロ、一つ実験に付き合ってくれない？確か
めたいことがあって。」

実験？今？ここで？

ウインドウは立ち上がる。

「すぐ終わる簡単な実験よ。大丈夫。痛くも痒くもない。立って。
やれやれ。すっかりこいつの研究対象だな、俺。」

俺は立ってズボンの砂を払う。

で？どうすりゃいいんだ？

言っとくが変な魔法かけたりするなよ？

「そんなことしないわよ。ちょっと眼を閉じて。じっとしてて。」

なんだってんだ。痛くも痒くもないけどものすげー痺れるとかねえ
よな？

ウインドウがすい、と俺に近寄るのが分かった。そのままふわっと
俺は何かに包まれる。

日に干した布団のような…。

待て！これ…抱きしめられてないか？

次の瞬間、濡れた柔らかいものが唇に当たる。

え？　と思わず眼を開ける。

すぐそばにウィンドウの黒い顔。

俺は彼女に：ウィンドウに抱きしめられながら、キスされていた。

杯よりこぼれしもの（前書き）

影の魔術師ウィンドウからまさかの…突然のキス！想定外の事態に
フリーズする俺！なんとそこに…先輩？ 走り去る先輩を追う俺！
なんだこの展開っ！シナリオ書いた奴出て来いっ！この手の修羅
場のノウハウゼロで…取り戻せるか？先輩からの信用を？

杯よりこぼれしもの

RPGっぽい異世界なう。

あまりのことに硬直する俺。

え？あの！ちよっ！ウィンドウ！…さん？これ…どういう？

ああああっ！

ぎゅうううっ！って…。

ウィンドウの体に俺の体が密着する。触れた部分は冷たくも温かくもなく…でも女性特有の丸さというか柔らかさというか…生身の感触は影のローブ越しに感じられた。意外にさらっとした髪からは甘いお香のような匂い。

ってか、こら！一回ストップ！お前！

「ヒロ…」

はあ…、とウィンドウのため息が耳たぶをくすぐる。

わわっ！顔が赤らむのを感じる。体温が上がり、心臓がばっくんばっくん音高く鳴る。

「わたし…」

ウィンドウが何か言いかけたその時。

がさっ、と砂浜に何かが落ちる音がした。見るとそこには…。

先輩！

先輩は信じられない、という表情で一步二歩後ずさりする。

何か言いかけて開いた唇が、なんの言葉も紡がずに閉じ、噛み締められた。

そのまま何も言わずに基地の方に向かって駆け出す。

待って！先輩！

俺はウィンドウを振りほどく！

…ウィンドウ！後でキツチリ説明してもらってからなっ！

俺から視線を逸らしてうなだれるウィンドウを残し、俺は先輩を追う。

先輩の立っていた場所に、倒れた三つの紙コップ。砂にこぼれた湯気を立てる液体の染み。コーヒーかなんかか？…ウインドウの分まで…ちいいいっ！

にしても先輩、足速えっ！

けどこのまま行かせるわけには…！

ぬおおっ！根性っっ！

大きくなる先輩の背中！

ダッシュ！ラストスパートツツ？

ぐっ！と先輩の肩を掴み強引に引き止める！

先輩っ！待って！違うんです！

…ああ我ながら安っぽい台詞！けど他になんて言う？

ばっ！と振り向いた先輩の髪からほのかに石鹸の匂いがした。

よく見れば髪、濡れてる？米軍の誰かに上手いこと頼んでシャワー借りたんだな。で、コーヒーまで…。こんな時だが流石先輩。たぐい稀なネゴシエーション能力。

「離してっ！何が違うのよ？」

…そりゃそうだ。

ウインドウに実験するから眼を閉じて立ってろって言われたんです！そしたらあんなことに…。

「ドキドキしたんでしょ？」

それは…あんなことされてすんなつうのが無理ですよ。

きっ！と先輩が俺を睨む。

その眼は涙で一杯だ。

「なんですぐ突き飛ばさないのよ！されるがままで！馬っ鹿じゃないの？」

俺もパニックって…頭真っ白になってどうしていいかわかんなかったんですよ！

「邪魔して悪かったね！あたしが来なけりやもつと先まで進めたのに！」

やめて下さい！そりゃウィンドウのことは嫌いじゃないけど、仲間として上手くやって行きたいと思ってるだけで…そういうんじゃないです！

「不本意にあんなことされたなら、なんであんな影女の肩持つの？少しは怒ったら？」

あいつの立場になったら…ひどく怒ったりできませんよ。あいつこの探索が無事終わったらまた…何十年か何百年か…とにかくすごく永い間、また塔のあの部屋で一人ぼっちなわけでしょ？誰かを好きになったりしたら、限られたチャンスに対してナリフリ構っちゃいられないんでしょうし。

「だから何されてもされるがままでいいっていうの？」

そうじゃないですって…。俺はあいつの気持ちには応えてやれません。それはあいつも分かっていると思うんです。だから「実験」だ、なんて騙し討ちしたんだろうし。

「聴きたくない！離してっ！離してよっ？」

先輩…。

「先輩なんて呼ぶなって言ってるでしょ？影女には無かった名前まで付けて名前で呼んでるクセに？」

……。

もなみはぼろぼろと涙を流す。

「だから…だから嫌なのよ。清水君のそばは。あなたのそばにいと、あたし…嫌な女になる！あたし自身が嫌う、聞き分けのない、感情的な人間に！分かる？…こんな…人前で怒り散らしたり、泣きわめいたりしたくないの。けど…あなたの近くにいると…そんな自分の生臭い所がどんどん出てきちゃうのよ！だから…だから…：ほら、気持ちの整理もできない。あたしがあたしじゃなくなる。清水君の言うことは分かる。けどイヤなの！我慢できないの！あの女と清水君がしたことが？」

…ごめん。俺に隙があったからだ。ウィンドウの気持ちにもっと早く気づいて、身構えとくべきだった。

「違う違う！悪いのはあたし！あたしがあたしを許せないし、気持ち悪いの！頭で考えればニブいあなたが魔女に騙されて唇奪われるくらいのはあつて当たり前と分かるの！でも納得しないあたしがいるのよ！あたしの中に！だからしばらく独りにして！今のあたしを見ないで！あたしのことは放っておいて？」

もなみは俺の手を振りほどくと基地に向かって駆けて行った。

俺は掛ける言葉も見つからず去って行く彼女を見送った。

もう一度追いかけて捕まえても…今のもなみに、なんて言っているやら見当もつかん…。

もなみがあんな風になるなんて…声荒げて怒って、ぼろぼろ泣いて…。そういやファムももなみもウィンドウが俺にちよっかい出そうとした時はえらく感情的になってたな。彼女たちは早い段階でウィンドウの気持ちに薄々気づいてたのか。にしても…ウィンドウ。あいつ…。

「…ヒロ。」

おうわっ！ウィンドウ！

「ごめんなさい。こんなことになって…。」

…ああ。それはもういい。過ぎたことだ。こぼれた水はコップには戻らねーからな。それよりお前からきちんと言きたい。なんであんなことしたんだ？

「…わたし、最初はあなたが…ヒロが不思議な何かを持っているんだと思った。普通じゃない何かを。それを解き明かすつもりだった。前に言った通り、あなたに質問したり観察したりして。」

ああ、それに協力するって約束はした。けどお前…あれは…。

「分かっている。ごめんなさい。普通じゃないのはわたしだった。あなたに今日した質問は、わたし自身の状態を確かめる為のもの。あなたの答えは…わたしには領ける内容ばかりだった。あなたを目で

追って、あなたとの会話が忘れられず、あなたのことばかり考えて
……。」

……。

「手間暇かかるのねって、あの時あなたには言ったけど、わたしも
そうだった。そんなはずない、好きになったりしないって。だって
わたしは……人間じゃ……ない。ウェルトウを護る塔の管理人。何万年
もの時を生きる、魔術師の影。誰であろうと人間を好きになって、
結ばれるわけ、ない。」
ウインドウ……。

「だけど確かめずにはいられなかった。そうなのか、そうじゃない
のか。もし確かめないまま、あなたと離れ離れになったら……わたし
は疑問と自己嫌悪を抱えたまま、永遠とも言える時間を生きること
になる。」

……その為の実験、か。

「そう。結果は想像以上だった。あなたを抱き締めて、唇を重ねた
瞬間……今まで抱いたことのない感情がわたしを包んだ。熱い何かが
湧き上がって、抑えが効かなかった。あなたの体温と唇の感触、汗
の匂い、心臓の鼓動……わたしの中にあなたが溢れて、あの瞬間……あ
なたが世界の全てになった。」

……ウインドウ、俺は……。

「その先は言わないで。分かってるから。あなたとどうこうなろう
って気はないの。始めからね。でも……それでも言わせて。わたしは、
あなたが好き。これまで出会った誰よりも。そして多分、これから
出会う誰よりも。影をくれなんてもう言わないわ。わたしはウイン
ドウ。あなたのくれた名前。あなたのおかげで魔法で生み出された
影だけのわたしと人間と同じか……それ以上の脈打つような心を持て
た。この任務が終わってあなたが去っても……あなたのくれた名前と
心は残る。管理室で独りきりでも、もう寂しくないわ。わたし自身
に、あなたの『かけら』が……宿っているから。」

……。

「…なんて顔してるの？ふられたのはあなたじゃないのよ？」
……ああ。

「大丈夫。言うこと言ったらすっきりしたわ。あなたに質問してよかった。確かにこれを言わずにいたら、永遠に管理室の床をのたうちまわらなきゃいけない所だった。誇張拔きに、ね。」

くすくすつと悪戯っぽく笑うウインドウ。

無理して強がってる様子は無い。

が…なんて言っているやら。

「あなたが悩むことじゃないわ。わたしがわたしの中で解決すべきテーマ。わたしのことなんかより、もなみのこと、考えてあげて。彼女には悪いことをしたわ。まさかあのタイミングであの場に居合わせるなんて。」

ほんとに…。明日どんな顔して会えばいいんだ？

「とにかく…：わたしが言うのもなんだけど、もなみに対して今日あなたができることはもうないわ。」

そうだな。無理に話し合おうとかしてもこじれそうだ。

「ならもう眠ったら？勇者様。体を休めるのも勇者の務めの一つ。

明日から森と砂漠の二つの魔境を越えるんだし。疲れてるんでしょ。…ひどい顔よ。十日くらい徹夜でもしたような。」

ああ。全くその通りの気分だ。

はああ…。なんて日だ、今日って日は。内容が濃すぎる。何もかも忘れて、ほんと十日くらい眠り続けてえよ…。

行方不明の海兵隊が残したデジカメが見つかったも、俺は見ない？（前書き）

ウィンドウのまさかの行動が原因で、気まずい感じのもなみと俺。
軍師と勇者が痴話喧嘩中って…生々しすぎないか？ いやいよ到着
した『侵入者を食べる森』。もう名前がイヤ。見た目は…。
…なんだこの森？　そこで俺たちが目にしたものとは？　？

行方不明の海兵隊が残したデジカメが見つかったも、俺は見ない？

RPGっぽい異世界なう。

6輪の装甲車に分乗し、西進して森を目指す。

RPGキャラチームは同じ車両。

もなみとは朝、挨拶したきり、一言も口を聞いてない。

ウィンドウは空気を読んで、俺から離れて鳥形態で空から追尾中のはずだ。

見た感じはいつものもなみ…だがどこか近寄り難いというか、話しかけづらいというか。

もともと理知的な表情なこと多いもなみ。

ちよつと硬い表情になるとこう…月は無慈悲な夜の女王、みたいな。ファム憑依状態の時はくりつとかわいい感じなのに、女の子って表情次第で別の人みたいになっちゃうんだなあ。

うーん…これから厳しい魔境ステージが2面ほど連チャン予定なんだが、軍師と名義だけとは言え勇者が痴話喧嘩中…。

僧侶不在で、いるのは回復魔法使えないバーサーカー属性だっちゃ巫女…。

一番頼もしいのが、だまくらかして取り入って味方にしてる米軍…。だまくらかし続ける為にウィンドウは召喚獣モードにはなれないし…。

RPGっぽい異世界って書くけど、こんなシチュエーションのRPG見たことない。

大抵、幼馴染の元気っ娘ヒロインとかクールな長身の剣士とか年齢不詳の色っぽい女魔導士とか獣人だけどフワフワかわいくて語尾が「ニャン」の奴とかさ。

健全な青少年もそうでない諸々の人々も、「一緒に冒険したらドキドキ楽しそう」と思える仲間と、しょばいお使いから段階的に市町村規模、国家規模、世界規模…下手すりゃ宇宙規模、の事件に絡ん

で行くよな。

ぽんっと異世界に放り込まれて、涙目になりながら生活してたら急に国家規模の事件に命がけで巻き込まれて、三四回死にかけながらクリアして、現世に戻ったと思ったらまた異世界に引き戻されて、ちぐはぐギクシャクなどんちゃかパーティーと宇宙規模の事件解決に挑む俺って…。

ある意味、真の勇者？

あ、ごめん。シャベリン。

ちよっと蹴った。

足元に寝かしてあるんだもん。

槍って車両に持ち込むと邪魔だな。

装輪装甲車、思ったよりサスペンションが効いてて、非人間的な乗り心地ではない。が、よく揺れる。文字通り道無き道をガンガン走ってるんだろう。

ん？スピード遅くなった？

ちよっとした斜面をゆるゆる登ってく感じ…。

その後装甲車は更にスピードを緩めると、ついに止まった。

着いたか。

最後尾に座ってi pod聞いてたそばかすだらけの若い兵隊さんがビツとイヤホンを耳から引き抜いて車両後部のハッチを開けた。

うわ…暑い！

なんかむわっと真夏日の熱気が…！

まだ早朝と言っている時間帯なのに。

荷物を手に外に出る。

地面に降り立って振り向くと…。

うおっ！森ってこれ？

基地のそばの広葉樹林と規模が全然…ってなんか樹木の種類！熱帯雨林に似てるけど…色が。緑もあるが所々、紫やら青やらエンジやら…海藻サラダみたいな。しかもなんか…樹という樹が。…背

が高い。三、四十メートルはゆうにある。

植物には違いないんだが、なんか木質の幹の樹木でなく、太い茎の草？大人三、四人が伸ばした手え繋いで抱きつく位の。

それらが、ずどん、と真っ直ぐじゃなく微妙にカーブして…びろーん、ってな感じ。

広葉樹だ針葉樹だってより…なんか色々だな。

でけえカイワレみたいのが群生してるかと思えばブロッコリーみたいなのがそこかしこに付いた背の高いのがあったり。緑のワタみたいのが岩にへばりついてたり。

あ、木質の木もあるじゃん！…と思ったら巨大な倒木…でかつ！これヤクスギが丸々倒れたくれえあるぞ？しかも倒れてから相当年月経ってるな、こりゃ。

風雨で激しく侵食されて丸太っぽくない…枝分かれしたカツオブシ

（削る前）みたいな感じ。

しかもそこかしこに…。

なんだこの森…自然の森か？これ。

ビジュアルだけ眺めると完全に悪い夢。

しかもなんつうか…他の惑星の未知の植物…とかじゃなく、どっか見覚えあるんだよな。

気持ち悪い。落ち着かない。

なんだろ？この感じ。

俺の肩にウィンドウがばささつと降りて来る。

どう思う？この森。俺この世界の植生についてはよく分らんが、なんか違和感あるんだけど。

「とても弱いけど魔力が働いてる。根っからの自然の植物ってわけじゃなさそうね。」

侵入者を食べる森、か。

毎度の勘ぐりだが…この木々、動き出すんじゃない？

「なんとも言えないわ…今の有効射程で感知するかぎり、細い樹

木に添え木をする程度の本当に簡単な弱い魔力しか感じない。けど植物そのものが肉食の動的性質のものなら魔力では判別できないし……。」

そういう植物ってこの世界でメジャー？

「いいえ。少なくとも塔の蔵書の記録にはない。神話やおとぎ話に、信憑性の低い記述が散見される程度。」

……けど海兵隊は帰って来なかった。

「用心しながら進むしかないわね。もなみから目を離さないで。何かある時、彼女が一人目にならないように。」

お前……もなみの心配、してくれるのな。サンキュ。

「勘違いだわ。優しいなんて思わないで。私は魔女よ。正真正銘のね。正直に言うともなみが心配なんじゃない。ただ……。」

ただ？

「もなみに何かあれば、ヒロは悲しむんでしょ？とてもひどく。」

……。

「……少し先行して斥候をするわ。用があったら指笛を吹いて。何かあるかわからない。けど確実に何かある……いる、と言った方がいいのかしら。くれぐれも、気をつけて。」

ああ、お前もな。ウィンドウ。

返事の代わりか、黒い鳥はけーんっ！と鳴くと俺の肩から飛び立った。

小さくなって行く影を見つめて俺はぼそっとつぶやいた。

あんな、ウィンドウ。

お前……自分で思ってるほど、魔女じゃないぜ？

その内「外伝 くファムの大脱走 く」とかで短編集に？（前書き）

いよいよ未知の森に突入！しかしもなみとの痴話喧嘩の熱は未だ冷めやらず…。あの…もなみ…。「…ファタリさんと代わる。」お！おうっ？なんかファム、久しぶりだな。「聞いてやヒロ！色々大変やってん。」そう言って彼女が語るファムルートのサブシナリオとは？

その内「外伝　くファムの大脱走　く」とかで短編集に？

RPGっぽい異世界なう。

出発前のブリーフィングによれば、森林地帯が約20km、砂漠が約15km。森林地帯の16km地点に河川が流れており、一日目はその周辺でキャンプ予定だそう。

先頭は…アベさんと小柄な米兵か。

ばささっ…と肩に黒い鳥が。あ、お帰り、ウィンドウ。早かったな。どうだった？

「見渡す限りこの奇妙な森ね…大きな生物も動き回る植物もとりあえず見当たりはしなかったけど。」

ウィンドウ、アベさんに付いてやってくれないか？普通の森ならともかく…先頭にお前がいた方が気付ける異変があるかもしれない。

「わかった。あなたはしんがり？」

ああ。

「気をつけて。優れた狩人は獲物の列の最後から狙う。役割上は勇者だけど…危ない時は必ず逃げるって約束して。」

…分かった。命あつての物种は俺の信条だ。そうなった時はここ一番の抜群の逃げ足を約束しよう。…アベさんを頼む。

「任せて。魔法に関してはヘマはしないわ。魔術師なめちゃだめよ。」

ウィンドウは飛び上がり、短く滑空すると列の先頭に向かって飛び去った。

あ、前の方歩き始めたっぽいな。

出発か。

ipodのそばかす兄ちゃんの後ろをもなみと並んで歩き始める。

あの…もなみ。

「…昨日はごめん。取り乱して。」

いや、俺の方こそ。ごめん。ウィンドウうんぬんもだけど…俺の子

供っぽいところとか気分屋っぽいところとかが…もなみのストレスになってた…んだよな？多かれ少なかれ。

「……。」

役割上の振る舞いもあるし、なるべく理性的に振る舞うよう気をつけるよ。

「……フアタリさんと代わる。戻って来たみたい。回復役がいた方がいいでしょ。英語の通訳がいりそうなら戻るから。」

あ、ああ…分かった。

なんか許された感はない。

もなみのトーンは終始淡々としていて事務的だった。

えと…もなみ…。

その瞬間、くるっと振り向いた彼女の顔がぱあっ、と輝いた。

そのままがばっと抱きついて来る！

「ヒロ！会いたかった？」

お？おうっ！フアム！

なんか久しぶりだな。無事だったか。えらく長いこと戻ってこなかったじゃんか。

「それやそれ！聞いてやヒロ！色々大変やってん。父上ったらひどいんやで。ごはん食べに戻ったら厨房に罌が仕掛けたって…網が落ちてきて捕まってん。」

…なかなか面白い父上だな。

「冗談やあれへん！うち野生のグドオかつちゅうねん！で、みっちり長々お説教。更にオレイグンフから上位司祭の家庭教師が来てつてやあ。木の神聖魔法の猛特訓や。朝から晩まで。休む間もなくずくっと。ずくっと。ずく…っと！まあ…お陰で育成の術はちつとは上達したけど…。」

植物や樹木の育成の魔法か？

そか。お前の使えるの月と木、だったよな。

ちなみにタチの悪い木を一発で枯らす魔法…とかある？

「はあ？なんで木い枯らさなあかんの？畑の野菜や果樹の育ちを良

くしたり、収穫量を増やしたり収穫時期を早めたりする為の魔法の
が役に立つやん。」

そうか…やっぱそうだよな。いや、必要になることがあるかも、と
思っ

「『育成』は加減が難しいねん。とにかく元気にでっかくするなら
うち得意やけど？」

食人植物を元気にしてもな…。

ん？作物相手ならでっかけりやでっかいほどいいんじゃない？加減っ
ているの？

「収穫時期を過ぎて育て過ぎると穂が落ちたり実が腐ったりすんね
ん。」

ああなるほど。すげえでけえリンゴとかができるわけじゃないのな。
「…リンゴってなに？」

あ、そか。俺の世界の一般的な果物だ。拳二つ分くらいの大きさの
丸い果物。赤い皮で実は白っぱい。しゃくしゃくした歯ごたえで味
は甘く、少しすっぱい…かな。

「へえ。プリーアみたいなものかな。」

…プリーアが分からん。

今回は抜け出せなかったんだな。家庭教師に隙がなかったのか。

「そや！それやそれ！巫女仲間にも協力してもろうて何度か脱走し
ようとしてんけど、どこに隠れてもことごとく見つかってや。」

…巫女仲間、脱走を手伝ってくれたのか？

「うちがする、うちたちの冒険の話がめっちゃ楽しmiraしいわ。う
ちが冒険に参加せんと続きが聞けへんやろ？」

なるほど。巫女とはいえ年頃の女の子たちだもんな。神殿なんかで
巫女生活なんかしてるんだし…俺たちの探索行の冒険譚なんて丁度
いい退屈しのぎか。

「せやねん。巫女仲間しか知らない隠し戸棚や地下納戸に隠れても
見つかって…なんでって？なってんけど。」

…ファミリーの諸君、残念なニュースがある。この中に裏切り者が

いる。…みたいな展開？

「ちゃうよ！うちの友達にそんな子おらんもん！父上や。うちのぱんつ全部に探知の呪符が縫い付けられててん！信じられんやろ？」
タンチノジュフ？

「簡単な呪文で居所が地図の上で光って映る追跡用の小っちゃい布の札や。それがうちのぱんつというぱんつ全部に！びっくりするわ！」

…父上。なんか…レベル高えな。

「しかも夜は家庭教師が眠りの魔法かけてくるんやで！うち奴隷やペットやないっちゅうねん！大概腹たったわ！」

徹底してるな。まあ、それだけお前のこと心配してる、ってことだろ？大事にされてるんだよ。

「それは…そうかも知れんけど。」

待てよ？それだけされてよくこっち来れたな。あ、もしかして今ぱんつ履いてな…

バチン！

ってえ！ひっぱたくことないだろ！

「履いとるわ！ヒロが変なこと想像するからや。」

履いてるんだ。だったらまたすぐ見つかるんじゃないか？

ってかその呪符の箇所だけ切り取れば？

「それが…切り取るとぱんつとして成り立たなくなる場所にぱっちり縫い付けてあってん…。」

…父上…上級者だな。

で、どうやって誤魔化したんだ？探知ぱんつ、巫女仲間にも履いてもらってるのか？

「んなことしたらその子が処罰されるやん。…まず眠りの魔法にかかったフリしながら抵抗してん。」

…高位司祭の魔法にレジスト？よく耐え切ったな。判定が微笑んだのか。

「咄嗟に精霊降ろしを使ってん。」

え！ファムも使えるの？じゃあ電撃で家庭教師もばんつも黒コゲで、ファムは全裸に：

バチン！

だからっ！アタマ叩くな！馬鹿になるだろ？

「なんで雷の精霊やねん！眠りの精霊に決まっとるやろ！」

ああなるほど。眠りの精霊に体を預けてりや、上位司祭だろうが法王様だろうが眠りの魔法をかけれるわけないわな。眠りそのものを司ってるコトワリの執行者なんだろ？精霊って。

「せや。うちも使うのはすごい久しぶりやけど。」

癒しの精霊とか：ばかすか降ろせばいいじゃん。強力に治せそうだけど。

「確かに癒しの精霊を降ろして直接術理を施せば強力な癒しができるけど：精霊降ろしは使い過ぎると：術者が人間でなくなるねん。」えっっ！どゆこと？

「塔で塩になりかかったやろ？憶えとる？」

忘れたくても無理だ。体が塩な上に、心は神様に飲み込まれかかったんだからな。

「太陽神様の御心に触れて：自分が薄まって消えてゆく感じ。精霊を繰り返し降ろすと、段々あんな感じになんねん。」

：そういうことか。魂とか心というか：霊みたいなのもののパワーが向こうさんの強いわけだ。

「最後は身も心も精霊そのものになって、世界の運行に組み込まれるんや。永遠に。」

：怖いな、精霊降ろし。あ！じゃあ、だっちゃ姉さん：じゃねえやラム姉さん、やばいんじゃないか？こないだ一度見ただけけど：結構ポイント貯まってね？精霊化の。

「せやねん。周りはもうやめろって繰り返す言うねんけど：。」

攻撃力として期待してたんだが：だっちゃ姉さんの今後を考えると10万ボルトは多用できないな。

：で、まんまと夜中に抜け出したのか？

「半分正解やな。そのまま抜け出してもぱんつで見つかるし。やから衣装部屋から二十枚位ぱんつ持ち出して、巫女仲間とばらまいてん。色んなやり方で。」

夜な夜なぱんつをばらまいて回る巫女軍団：中学生が考えた都市伝説？教義とかに豪快に反してないか？

それでも結局、一個一個見つかったら：時間の問題で捕まるんじゃない？

「まあな。でもみんなノリノリでや。工夫してぱんつが移動するようになしてくれてん。」

ぱんつに命を与える魔法：エンチャント・ぱんつ、とかか？

「バルディア！どんな魔法やねん！そないな魔法があるかいな。樽に入れて川に流したり、肉に縛り付けて野良ティーシャにやったり
…」

野良ティーシャ？犬か猫みたいな奴かな？

「巡礼者の荷物に紛れ込ませたり：そのうち誰かが祭祀用の浮き灯籠を勝手に出してきて：」

ウキトウロウ？

「紙でできたこれくらい袋の口に火種が下がってて：火をつけると飛んでくやつ。」

ああ：ラプンツェルで飛ばしてた奴か。見る度に火事にならないか心配になる小型の熱気球みたいな。

「ラプン：なんとかは知らんけど、多分それや。最後は教会のテラスから、みんなで一個ずつぱんつをくくりつけた浮き灯籠を、夜空に飛ばしてん。」

あー：幻想的なラストだな。ほのかに光りながら夜空に舞い上がる幾つものぱんつ、か。

：どんなサバイベントだ。

ま、参加した巫女ガールズにはいい思い出になりそうではあるが。ダミーはそれぞれが移動するようにばらまいて：で、結局ファム本体はどこに隠れたんだ？

「シート破いて結んだ作ったロープを窓から下げて、如何にも外に逃げたでーって見せかけて、衣装部屋に隠れてん。」

：探知されても元々ぱんつ置き場だから探されないって寸法か。
なんか：ファム、賢いな。

「やろ？布団袋に食料と水と潜り込んださかい、ちよつとやそつとじゃ見つからんと思うで。」

そか。お前はお前で大変だったんだなあ…。

「今頃大騒ぎやろうけど…父上が悪いねん。年頃の娘のぱんつに片っ端から呪符縫い付けたりなんてした罰や。」

それでも逃げ切ってるわけだから…ある意味、お父上の処置は適切か…やや不足だったと言ってもいいのかも。この娘にしてこの親ありって感じ。

「それよりもなみ、どしたん？元氣なかったみたいやけど？」

ああ…実は昨日一悶着あってな。

「何があったん？ヒロ、なんかしたん？もなみに。」
してねーよ！

されたんだ、ウィンドウに。

あいつ俺のこと…その…好きだったらしくて。急に抱き締められたりしたんだよ。

「はあ？なにそれ。ヒロはされるがままやったん？」

だって実験だから目えつぶってじつとしとけって言われたんだもん。

「今時七つの子供でもそんな見え透いた手には乗れへんで。」

：悪かったな。

で…それをもなみに見られて…。

もなみ、泣きながら怒っててさ。事情を説明したり謝ったりしたんだけど…とりつくシマがなく。

「……。」

なんか…すまん。ファム。俺…隙だらけでグダグダで…。

「…大体ヒロは鈍すぎんねん。うちなんてすぐ分かったで。ウィンドウはヒロに気があるって。最初にヒロの影が欲しいって言った時。

」

…すげえ初期だな。ほとんど出会ってすぐじゃねえか。

「…ヒロはな、損得抜きに誰彼構わず優し過ぎんねん。もうこれ以上…ライバル、増やさんとして。」

彼女はそう言うのと俺の手を取って、きゅ、と握った。

俺は何も言わずに、彼女のその手を同じだけの強さで、きゅ、と握り返した。

その内「外伝 くファムの大脱走 く」とかで短編集に？（後書き）

【作者より】お気に入り登録して下さいる皆様、ありがとうございます！

今までたどり着けるよう…頑張ります。
今回もきちんと結末

ていく いっと いーじー。(前書き)

異世界の森をゆく俺たち。若い米兵が話しかけてくる！う！どう答えるべき？英語の女神ニューホライズンよ！我に力を？

ていく いった いーじー。

RPGっぽい異世界なう。

奇妙な草木が生い茂る異世界の森。

どこかでシャアッシャアッ、とかクコココッ、とかなんらかの生き物の鳴き声がある。生き物本体は見えないが。

足元は下草まばらな…砂利っぽい地面。歩きにくくはない。

時々、プーンと小さな羽虫がとんでたり、茂みがカサッとちよつと揺れたり。ここはここで土着の生物が…ちゃんと生態系を成して生息してるっぽいな。

うおっ、木にくっついてる黒いカタツムリみたいなのでけえ。
バレーボールくらいある。

うーん…腕が痛え…。

足も…完全に筋肉痛。

昨日の練習試合二連戦と…足はもなみ追っかけてダッシュした時か…。

一応寝る前ストレッチしたけど…オタク青年の基礎体力不足を補う程の効果はない、か。

っつかヤワだなあ、俺。

ぶっちゃけ勇者とか…百、ガラじゃねえよ。

向こう帰ったらジョギングだけじゃなくて短距離の走り込みもしよ。筋トレも…腕立て腹筋背筋と全然違う筋肉なんだな、剣振るのって。多分細かく言うと、刀剣の種類やファイトスタイルによっても…違うな、必要な筋力が。

公園でブロードソードなんて素振りしてたら捕まるかな…。けど練習はちゃんと自分の剣でしたいなあ…木刀やバットじゃなく。重さや長さが違うと…変なクセとかつかない？

…でも向こう帰ったら剣術自体が必要ないか？

：いや、なんにせよ体は鍛えといった方がいいよな。なんかこの探索が終わっても：いつまた強制召喚されるかわからんし。

：頼むから就職活動中とかやめてくれよな？

「どしたん、ヒロ。難しい顔して。」

ああ、昨日エレンとアベさんと剣術の稽古してさ、ガチで筋肉痛。

「癒し、使う？」

いや！いいよ。もっとヤバイ状態がこれからあるかもだし。

「じゃあ夕暮れ間近に。回数が残ったたらな。」

：おう、そうか！月が出れば回数リセットか！

回復魔法：へへへへ、あの気持ち良さ、久しぶり。楽しみ。どうか回数が残りますように。

「ヒロ：顔がなんかやらしいで。」

む！いかん！勇者勇者！セルフコントロール、セルフコントロール
：すー、はーっ、すー、はーっ…。

海兵隊は一班四名の三班プラス現場指揮官一名で、計十三名。

ほぼ二列縦隊で森を行く。

先頭はアベさん with 鳥ウィンドウと小柄なポイントマン。そのすぐ後ろに白人の背の高い中尉：この人が隊長：と、エレン。列の半ばにヴァリーとラムだっちゃ姉さん。

：あの二人：なんか仲いいな。

サブシナリオ発生？

しんがりが俺とファム、だ。

海兵隊一班に二名ずつ、RPGキャラクターが混ざってるって感じ。

に、しても暑い！

湿度も高い！

たらたら汗が出る。真夏の体育館で部活中、みたいな。

手拭いで汗拭いてたら、ipodの兄ちゃん、振り向いて話かけて

きた。

「Sir Hiro, Can you understand our language?」

う！なんて答える？もなみが打ち合わせしようって言ったのはこういう個別のシチュエーションに対して…か。

でも…もなみも喋れるわけだし、ここは…。

あ、りろう。

「Good. We'll take a brief break, 10 minutes. : OK?」

危ね、つい腕時計見るアクションしそうに…ぐっところえて！

おーけ。のーぷろぶらあ。

ipod兄ちゃん、ちよっと笑ってうなづいた。

「ヒロ、なんて？」

ああ…10分休憩だつてさ。

「ジュップン？」

ええと…火にかけたちっちゃ目の鍋の水が沸く位の間。…ま、目安にはなるだろ。

「まあ、ちよっと休憩ってことやね。にしても暑いなあ、汗が止まらんわ。」

ぱたぱたと胸元を開け閉めするファム。

じー…っと注目しそうになるのを我慢して、俺はぐるっと辺りを見回した。

…あれ？今の…いや、気のせいかな？茂みの向こう…ちよっと離れた場所に、ぼーっと立ってる人影みたいのが見えた気がしたんだが。再び見直したときは何もいなかった。…疲れてるのかな。…手足は筋肉痛で痛いし暑さにバテ気味なのは間違いない。

え！なに？なんか同じ班の黒人の兄ちゃんが話しかけてくんだけど…えれえ早口で聞き取れない…これ英語？

そーりい、ぷりーず とーくもあ、すろーりい。

「Sir Hiro, Do you have any tabo

o with foods?」

食事上の禁忌はあるか? かな?

のー、あいどん。

「Any caloric restriction?」

カロリックレストリクション?

宗教上の制限のことか?

のー、あいどん。

あいはぶのーれすとりくしょん、ういずふーず。

黒人の兄ちゃんバツクバツクからなんか出すと投げてよこした。キヤッチ! うー筋肉痛が…!

あ、お菓子だ。

本場のチョコバー…スニッカーズ!

いかん! 初めてみるような態度しないと…?

黒人の兄ちゃんがパッケージ破いて食べるんだよ、みたいにジェスチャー。

恐る恐る…剥くフリする俺。

うわ…暑いからドロドロだぞ。

黒人の兄ちゃん、もくもく食って目をむき、うまいぞ! みたいなアクシヨン。

そうっとひとかじりする俺。

甘いし…ぬるっ!

ぎこちなく微笑んで

さんきゅ。

「ヒロ、それ何? おいしいん?」

と、ファム。

向こうの世界のお菓子だ。

甘い。少ーしほろ苦い。食べてみる?

俺から受け取ったスニッカーズをがぶつと食べるファム。

一口目からガツツリいったな。

バラエティー向きだ。

「なにこえ！もぐ、おいひい！もぐ、なんへおはひ？」

：しゃべるか食べるかどっちかにしろよ。お菓子の名前、俺が答えたらおかしいじゃん。：別にシャレじゃないぞ。

あ、そだ。

ごそこそ。

異世界名物、かったいジャーキー。

へい！どうゆらいくだらいみーと？

「J a , z e k e r !」

やあぜえかあ？どっち？

：まあ、やとけ。

俺は自分用の食料袋から掌半分くらいの大きさのジャーキーを出す
と黒人の兄ちゃんに投げた。

とらいざっと！

兄ちゃん、上手いことキャッチして、

「T ! K ! S M !」

：口語の会話でもティーケー！って言うんだ。

なんでここでS M った？

：ま、いいか。

わい、だぶりゅう。

ジャーキーをかじる兄ちゃん。

で一言。

「：H a r d !」

あいしんくそう。

なんか知らんが笑えて来て、俺は黒人の兄ちゃんとひとしきり笑った。

振り返ると、黙々とチョコバーを食べるファム。

口の周りがチョコだらけで、昭和のドロボーみたいになってて、更に吹いた。

破魔の剣（前書き）

人食いの森を行く俺たち米軍・RPGキャラ混成チーム。異世界ならではの珍しい草木、生き物…うおっ！あれすげえな、デカイし群だし…何より空飛んでるぞ。その時、突如響き渡る悲鳴！のんびりした空気一転、訪れる危機！剣が…銃が効かない？ 破魔の輝きよ！我に力を？

破魔の剣

RPGっぽい異世界なう。

三回目の休憩。森のちよつと開けたところで。

大休憩でご飯中。

米軍の人たちもクッカーで火を炊いてレーション温めたりコーヒー入れたりして食べてる。

あれが有名なレーションか…。

丸い缶じゃないのな。凹みのある四角いパッケージにビニールシールがされてて、シール剥がして食べる感じ。

俺たちも持参食料を食べるが、例によってかったいジャーキー。まあ火であぶると少しはマシだ。鍋出して煮炊きするのはオオゴトだから野営の時だけになるな。持参食料の中には塩漬けの肉とか芋やタマネギみたいな野菜もあるから、煮炊きできるならこっちの世界の食事としてはメジャーな「肉野菜ごった煮スープ」が食えるんだが。

大分：森も深くなって来て見かける生き物も増えて来た。ドッジボール大のカタツムリ、そこかしこにいる。カタツムリつつうかほとんど貝殻に隠れててぬらつとした裾みたいのと長〜い触覚だけが貝から出てる。

手の平サイズの白っぽく透き通った虫：なんかすごい。アノマロカリスみたいなデザインで体幹からワラワラ生えた足だか羽だかを波打つようにくねらせて音もなく宙を泳ぐ。アノマロカリスわからない人は悪いけどググってね。

それとは別にでかい蚊みたいな普通？の羽虫もいるのな。ブーン：なんつって。

よく見れば木：というかぶつとい草に青びかりするアリみたいのが列を作っていたり、かさつて音に目を向ければトカゲそのものな

生き物が普通にいたり。

あ。現世で見るのと似た生き物もいるけど、改めて異世界なんだな

：あ！何あれ！メダカが！デカイメダカが空中を泳いでる！すごい！しかも、1、2、3：群れだ。ざっと二、三十匹はいる！こっち来る！：うわ。でかいな。小さく見積もっても1mは超えてる5、6年生の背丈くらいあるぞ。どうやって空中を泳いでるんだ？魔法生物か？

あ、近づいてくると微妙にメダカとは違うな。胸ビレが大きめで尾ビレの下側が長い。びろろん、と。そしてウロコ。ピンクがかった銀色のそれ。光を跳ね返す時、色艶の違いでなんかビッシリ模様が見える。アラビア語のような：文字？

アベさんの向こうに立って見張りしてた小柄なポイントマン：あれ？あの人！女の人じゃん！女性兵士？：わお。

女性兵士は飯食ってる別の兵士からビスケットだかクッキーだかを受け取ると、巨大空中メダカに餌付けし始めた。

ビスケットを投げると、空中で器用にメダカがパクつと食べる。おお。メダカが更に集まって来る。

上空を周回してる奴まで入れると：百匹近いかな？

女性兵士はメダカ使いのようにあっちへ投げ、こっちに投げ。仲間兵士がスマホだかデジカメだかで動画を撮る。

：なんかすげえな。

ファム、あの魚みたいなの：魔の森にはいなかったけど。この世界じゃ普通の生き物か？

「まさか！うちもあんな見るんは初めてや。うち一応、巫女やさかい、古今の神話や伝説も勉強すねんけど、あんな生き物は聞いたことないなあ。」

ふーん。

まあ物理的におかしいもんな、流石に。あいつらもどっか別の世界

から漏れ出して来た奴らなのかも。

「ヒロ、見てほらあの人！」

見ると女性兵士は手から直接メダカに餌付けしている。

「かわいいなあ。うちも餌やりたい。」

確かに。こんな機会はそうはないし、折角だからやらせてもらって…。

と、俺が言いかけた瞬間、ぎゃあ、と言う悲鳴が当たりに轟いた。皆が声の主を見る！

女性兵士！

あ！メダカが腕を！

女性兵士の腕をバツクリ啜ってる！

女性兵士は引き抜こうともがくが引き抜けない。

メダカが口を動かす度に「アアアッ！」「ノオオッ？」とか苦痛の叫びを上げる！

色めきたった周囲の兵が各々ライフルをメダカに向けるが、隊長がそれを制する…確かに、女性兵士に当たっちゃう。

「オオオウッ！」

女性兵士の腕からぼたぼたと血が滴り落ち初めた！

迷彩服の袖が血に染まる！

メダカは宙に身を振って食い千切ろうとする！

このままじゃ…！

俺が剣の柄に手をかけて走り出そうとした瞬間、ザンッッ！

メダカの頭部が白く輝く刃に両断された！

アベさんだ！

取れたメダカ頭と共に女性兵士が倒れ込む。

頭を落とされたメダカの身体は二度痙攣すると反り曲がって空中をゆらあゝっと上空に浮かんで…あ！そうか！この森の植物！分かった！見覚えある筈だ！「水草」だ！魚が加わってピンと来た！デカイ水草…タニシ…メダカ…。

ここは…この森は水槽なんだ！魔法で造られた…陸上の！その水底を歩いてるのが俺たち？

メダカの一匹がすごい速さで俺とファムに突っ込んで来る？

？…速いっ！

ファム！伏せろっ！

俺は韜走らせた剣を抜きざま、すれ違う瞬間の飛びメダカに叩きつけた！

ばいんっっ？

跳ね返った？

何だ？今の感触？

満水のビニールプールの横面を木刀で叩いたみたいなの。

体勢は不完全だったが、斬れていいタイミングのはず！

見回せば本性を露わにし、ひゅんひゅんと周囲を飛び回って人間をついばもうとする飛びメダカ！

【タタタッ？】

うわ！至近距離の小銃の銃声！

うるさっ！鼓膜が叩かれるようだ。顔全体で空気が振動してるのが分かる。

i podの兄ちゃんか。

米兵たちがそれぞれに射撃を開始する。辺りに響き渡る銃声のフルコーラス。排莢、装填で擦れるパーツの金属音。立ち込める花火の後のような火薬の燃焼臭。

これで飛びメダカの数も…あれ？

減らねえな。

みんな結構撃ちまくってるが仕留めたのは、アベさんの一匹と…あ！今もう一匹。なんで？みんな射撃苦手チーム？

うお！また来たっ！

ファム？平気か？

「うちは平気や！ヒロ！うちあの腕噛まれた兵隊さんのところに…」

危ねえファムツ？

べいんっ！

くっそ、また…！

今の…突っ込んで来る飛びメダカの軌道変わるくらい強めに入ったのに！

米兵たちの射撃も飛びメダカたちを一瞬ひるませたりはしてるが…致命傷にはなっていないようだし。

いや！待て…！戦闘の一幕で何匹ものメダカの死骸が空に登っていくエリアが…アベさん、とエレン！

アベさん…すげえ！

ハイテンポな曲で踊るダンサーのように矢継ぎ早にステップを刻みながら、クルクルと身を翻す。

白い光を放つ剣が閃く度、哀れな飛びメダカが絶命し、動かなくなつて宙に浮いてゆく。

そしてエレン！

アベさんとは対照的に二刀を構えたまま微動だにしない。

おおっ！

飛びメダカが間合いに入つた瞬間、弾かれたように反応してメダカを真っ二つ？

で、即座に元の構えに戻る！

軽量装備のアベさんと違い、ヴァリーは三つ揃いの甲冑着込んでる。アベさんのように機動力と運動量で推すともたないわな。

…にしても、なんであの二人に斬れて俺に斬れないんだ？飛びメダカ。…腕の差？

とかなんとか気が散ってたらどんっ！と誰かに突き飛ばされた！

うわっ！とフラついたところにもう一度？メダカ！避けれん！どむっ！

尻もちついて完全に転ぶ！

そこに更に三匹のメダカが！

すげえ速さで俺に殺到して来る？

わ！やべえッッ！この体勢じゃ…？

その時！

ボウワアッ！と目の前に炎の壁が立ち昇った。

光を放つ銀色の槍が、炎にひるんだメダカ三匹をまとめて串刺しにする！

「…ヒロ、早く起き上がるっちゃ。」

ケンタウロス・ヴァリー！…に乗った、だっちゃん姉さん！

ありがとっ！

だっちゃん姉さん、手に持った手帖みたいなのから一頁紙を千切る。

途端に紙は姉さんの手で燃え上がる。姉さんが短く歌うと、手の炎は蒼く輝く矢となって飛びメダカを撃った！ボツと火達磨になる飛びメダカ！

「ヒロ！剣にウィンドウの魔法を！…ファムナ、オッグ・スウイエム！オトルオフ・ジャディン！」

ファムは姉さんに引き上げられ、ヴァリーの馬部分に。…怪我人のところに行くってことだな。俺は彼女の足の裏を掌で押し上げて乗るのを手伝う。…魔法？ウィンドウの？やっぱなんかワケありなのか、あのメダカども。

「ヒロ！気いつけてな！」

ああ！お前もな！ヴァリー、二人を頼む？

…ってハッキリ日本語で言ったがヴァリーは力強く頷いた。

…こんな時だけ改めてオットコマエだなあ。二人の巫女を乗せ、戦場の喧騒の中を駆け去って行くヴァリー。

入れ替わりにウィンドウが飛んで来た。

「ヒロ！剣を置いて！早く！」

言われるまま地面に剣を置き、予備のナイフを抜いて身を屈める。ウィンドウは抑揚の少ないお経のような呪文を流れるように唱える。

ぼんやり：はつきり白く輝き出す俺の剣！

ウィンドウ、これは？

「あの魚、体の表面にンルイー文字がびっしり浮き出てる！恐らく理違えと矢滑りの術理方程式だわ！」

コトワリタガエとヤスベリ？

「理違えは魚が空中を泳げるように周囲の物理法則を書き換えてる。矢滑りは対象に加わる衝撃モーメントの被受角度を擬似的に大きく傾斜させて…」

詳しい説明は後だ！

この光ってる剣なら奴らを斬れるんだな？

「斬れる。」

米軍の鉄砲には掛けられないのか？矢滑り破りは！

「破魔の輝きは銃じゃなく、一発一発の弾に施さないと。そんな時間：…」

ねえな、なるほど！

魚の体の模様が魔法の源？

「そう。弓矢や剣を弾くよう魔力を込めた方程式。」

じゃあ、目はどうだ？ 奴らの目？

「目にはンルイー文字はない。刃は通る。弾も当たるわ。」

俺は息を吸い込んで叫ぶ！

エイム！ゼアアイズ？

ゼアスキン・プロテクテッドバイ・ザ・マジカルフォース？

米兵たちがそれぞれ頷いたり手で合図したりインカムで他の米兵に伝えたり。

他のみんなの武器には？俺が最後？

黒い鳥が頷く。

「あなたがしんがりだったから。ごめんなさい遅くなって。もっと強烈な魔法もあるけど、剣の使い手にも危険な術なの。増してこんな乱戦の中、味方に当たったら…」

分かった。十分だ！サンキュ、ウィンドウ！

あいつら数が多い！

油断してパツクリ喰われたりすんなよ！

「…魔術師なめちゃだめよ。」

黒い鳥は鳥のくせにウイंकをかますと普通の鳥ではあり得ない速度で舞い上がった。

そこにぎゅんっ！と飛びメダカが突っ込んで来た！

乗れ体重！走れ刃？

シパツツ？

手応えが軽い！

二つ折りの紙を、挟んだカッターの刃で切った時のように！

綺麗に二つに割れた飛びメダカがそのままの速度で通り過ぎて行く！

…行ける！

破魔の輝きよ！

俺は仲間を助けたい！

輝け！もっと強く？

腐敗の剣（前書き）

旧帝国の神殿の島。不気味な森で迎える大ピンチ！銃撃の効かない空飛ぶメダカ：こんな冗談みたいな連中にやられてたまるか！対抗魔法をエンチャントした剣を手に、戦場を駆ける俺と仲間たち！そこに：さらに絶望的な脅威が現れる！巨大な：あんな奴、倒せるのか？俺？

腐敗の剣

RPGっぽい異世界なう。

ファム！どこだ！無事かっ！

辺りは怒号と銃声、悲鳴が飛び交う戦場そのものだ。

来た！飛びメダカ？

のたうつような泳ぎの動きで一直線にこっちに…！

がつツツ！

ぐわっ！痛え！

後ろから？体当たりして通り過ぎてく！

って前から来る！

スピッ！

浅い？

ヒレは落としたけど仕留め切れてねえ！

よろよろ変な動きで逃げてく！

一旦これで…。

ふおっ、と後ろから風切り音！

咄嗟に身を屈める！

高速で飛びメダカが通り過ぎる！

痛え…さっきぶつかられた後頭部、こぶになってる。

これ一匹一匹は大したことないけど数が…。みんなは？

顔を上げると辺りは…死んで宙に浮く飛びメダカ、半狂乱で小銃を撃ちまくる米兵達、各々の刃を振るう異世界メンバー、ひゅんひゅんと飛び回る元気なメダカ…ヤツらの鱗が陽に輝いて時折キラツとする。…なんだこりゃ。地獄か？

息を吸い込む。叫ぶために。

カバー！イーチアザー！

エイム・ゼアアイズ！

俺は走りながら叫ぶ！

キープ・クールヘッド！

ウィーキャン！ウィン！

立ち止まっては迫るメダカを斬り捨てて！

カバー・イーチアザー！

トラスト！チームメイツ！

ファム…いた！

だっちゃ姉さんと馬ヴァリーに護られながら女性兵士に回復魔法の真っ最中。

ファムの援護に加わり、剣を構えて背を向けたまま。

ファム、無事か！兵隊さんは！

「うちは…」

ぼうわあ！つと炎の壁！

熱っ！近いよだっちゃ姉さん！

「うちは大丈夫。この人も…施術が早かったさかい、大丈夫や。」

「ここはうちとヴァリーで足りるっちゃ！ン・アベエモン・エレンもあの様子なら大丈夫！ヒロは兵隊たちのサポートを！みな混乱してるっちゃ！」

分かった、と言おうとした時、何かに突き動かされたように俺はだっちゃ姉さんをどんっ、と突き飛ばした！

俺自身もなんでそんなことをしたのか分からない。

身体が勝手に動いたようだった。

ピュンピュンピュン！

次の瞬間、姉さんのいなくなった空間に米兵の小銃の流れ弾が！
づあっ！脇腹かすめたっつ！

姉さん側に一步踏み込んでたからな。痛い！鎧下に血の滲みが拡がって。危ねえなっ！ちっとズレたら致命傷だぞ！痛い痛いっ？誰だコンチクショ仲間撃ちやがって！いいいっ！痛えよおうっ！
突き飛ばしてからここまで…0・2秒。

「ヒロ、ありがとう！」

ああ！確かに兵隊の混乱をどーにかしねーと…！
思いつきり叫ぶ。同志討ちなんて笑えねえっ！

コーション！ウロングシューティンツツ？

ラム姉さん！ヴァリー！

悪いがここは任せた！

ちよっと思ってくらあ！

「ヒロ！無理したあかんで！」

ああ、ファムもなっ！

と、振り向いて駆け出そうとした時…。

もわあっと砂埃が辺りに舞上がった。えほっ！口に…！

なんだ？爆発…じゃなさそうだが？

モヤの中から何かが飛び出して、空中の飛びメダカを捕らえた！

あれだけいた飛びメダカの群れが、さーっといなくなる！

ハサミ…メダカを挟んでるのは巨大なハサミだ！カニ？いや！

徐々に晴れる砂埃から姿を現すそいつ！

わらわらと蠢く脚、陽光に鈍く輝く鎧の様な甲殻、尖った頭部の先から伸びる長い長い触覚、表情のない、ボーリングの玉のような目

…ザリガニだっ！白い…巨大なザリガニ？

で…でかい？

電車くらい…いやそれより一回りでかい？

ヒョルルルッツツ？

…何この音？ザリガニの…鳴き声？初めて聞いた…ってそんな場

合じゃねえっ！

海兵隊が撃ちまくる。

シポッ！ツズバンツツ？

と爆発の華を咲かせるのはライフル下部オプションのグレネードランチャーだろう。

だが奴はもろともしない！

わらあつと沢山の脚で巨体を持ち上げ、ハサミを微妙に持ち上げて…。

ザワワッ！

速い！10tくらいはありそうなあの身体で…？

そうか！「理違い」…！水中の、浮力がある状態の物理法則を作り出してるのか！じゃあ甲羅も当然…！

タタタッ！

タタン！タタン！タタン！

シポッ！ツズバン！

やっぱり…！

タングステン・カーバイト製の5・56mm NATO弾の雨も、H
NIW型高性能成形炸薬の爆轟も全く意に介さない様子。

「矢滑り」か、くそっ！

やつは感情を持たない殺戮機械のように海兵隊の列にすごい勢いで突っ込んだ！

辺りにもうもうと砂埃が舞い上がる！

…この埃の舞い方も、水中のそれだ。

あ！あいつ、ハサミで誰か挟んでるっ！

「Nooooo…？」

スニッカーズの…黒人の兄ちゃん？

いかん！助けないと？

俺が駆け出そうとしたその時…？

「エグ…！」

黒人の兄ちゃんは口から大量の血を吐いて動かなくなった。

身体が不自然に二つに折れ曲がる。

ぶらん、と服で繋がってはいるが、両断されているのは一目瞭然だった。折れ目の衣服は溢れ出た血でズブズブに紅黒く染まる。

化けザリガニはゴミのように黒人の兄ちゃんの遺体をその辺に捨てた。

立ち尽くしてそれを観ていた俺の中で何かが切れた。
頭がくらくたとして、次の瞬間、全身を煮えたぎるような感情が支配した。

あいつッ！…許せん？ あのザリガニ…ブツ殺す？

強く指笛を吹く。

来い！ウインドウ？

鳥ウインドウが肩に来る。

「ヒロ…平気？ 顔が真っ赤よ？」

使用者にも危険な、威力のある魔法がある、って言ったな？ 俺の剣に掛ける、その魔法。今すぐ。

「腐敗の雲…でも、この魔法は…。」

いいから早くしろ！ 二度は言わねえ！ 今の俺の剣は…お前だって斬れるんだぞ！

「…分かったわ。剣を地面に置いて。鞘ごとよ。」

ウインドウが再び俺の剣に呪文を唱える。さっきの破魔の輝きの時より、起伏のある複雑な呪文に聴こえた。…剣を納めた鞘の雰囲気…変わった？ なんか影が濃くなったような…。

「腐敗の悪魔を憑かせたわ。腐敗の雲は鞘から抜いて最初に斬ったものに発動する。例外なしに。あのバケモノを一撃で仕留めるなら…上に登って体の中心、体幹に向けて突き刺すのが確実ね。…いい？ ヒロ。抜いた後の刃には絶対に触れては駄目。魔法があなた自身に向けて発動し…人一人なら綺麗に全部、酷い臭いの泥みたいになって崩れ落ちるわ。どんな魔法や奇跡でも…二度と生き返ることはできない。気を付けて。」

…分かった。

バリーイイツ？

パカタッパカタッパカタッ！

「ヒロ！」

半人半馬のイケメン騎士が駆け付けける。

俺は問答無用でその背に跨がる。

ウィンドウ！

「何？」

勢いで脅すような事言ってますまん…本気じゃなかった。

「…知ってる。さあ行きなさい勇者様！仲間の、仇を討って？」

ありがとう！ウィンドウ！

オッグ！バリー！

バリーは一度前脚を持ち上げて勢いを付けると疾風となって混迷の戦場を駆け抜ける！

血も涙もない、殺戮の甲殻類に向かって！

銃声や怒号、悲鳴がドップラーしながら通り過ぎてく！

視界の中、どんどんその大きさを増して行く白い化けザリガニ。

振り上げられた巨大なハサミ！

ごう！と音を立てて振り下ろされたそれをバリーは巧みな脚捌きで躲し、かいくぐる！

化けザリガニとすれ違いざま、俺はバリーの背からザリガニの横っ腹に飛び移った。

近くで見れば甲羅の表面は太い硬質の毛が薄い密度で生えており、甲羅自体もボコボコと丸い起伏が一面にあって…考え無しに来ちゃったけど、登れる！これなら！

生理的に不快な材質の毛をむんずと掴み、わしわし化けザリガニの甲羅を登る！

黒人の兄ちゃん…。

名前も知らなかった…。

俺にチョコバーくれて…。

俺の硬いジャーキー食べて…。

一緒に、笑って…。

それを…！あんな風に…？

甲羅の頂上。部位で言うところの胸部の天辺に。

揺れる。迂闊に剣は抜けない。

よろけて自分に当たったら…ジ・エンドだ。

化けザリガニの背に掴まり、その動向に注意を払って一瞬のチャンスを待つ。

「アアアアアッツツ？」

下の方で誰かの悲鳴！

あ！i podの兄ちゃん！

エスケープ？ ハリイイイツ？

…腰抜かして倒れてる？

化けザリガニはi podの兄ちゃんをそのハサミに捉えようと動きを止め、ハサミを振りかぶった！

てんめええっ！させるかあああつつ？

俺は腰の鞘から剣を抜く！

鞘走った剣は真っ黒な雲の尾を曳いた。

剣自体からもうもうと立ち昇る、黒い雲。

これが…腐敗の雲！

喰らえザリガニ野郎！

黒人の兄ちゃんの、仇いいつつ？

ズ…ン！

やらけっ！

俺の剣はバターに刺さるバターナイフのようにあっさりやつの甲羅にめり込んだ。

たちまち足元の甲羅に拡がる真っ黒な染み。

うわっ！ジュブツて…足の下からなんか煮汁みたいのが…。

ヒョルルル……ンン

化けザリガニは両のハサミを振り上げ、仰け反って、か細く鳴いた。

うお？ 俺は振り落とされそうになって慌てて甲羅の毛を掴んだが……それもぼそっ！と抜け落ちて、甲羅を滑るように地面に落ちた。ぐ、えっ！

い……たっ！

すぐそばで奴の足がバタバタともがく。

っ危ねえ！

俺は痛む身体を転がして、急ぎ奴から離れた。

ぐがっ！左肩が……！落ちた時、おもっくそ打った。

いでええ……。

肩を押さえて庇いながら、何とか起き上がる。

ばさささっ、と右肩に鳥ウィンドウ。

「大丈夫？ ヒロ。」

ああ……なんとか。魔法は？ 奴に、効いたか？

「完璧よ。見て。あれ。」

振り返って化けザリガニを見ると……そこに化けザリガニはいなかった。

黒ずんだ小山が、異臭と煮立ったようなあぶくを出しながら、ぐずぐずと崩れつつあった。汁っけの多いヘドロ溜まりを作りながら。

そのヘドロ溜まりから僅かに顔を出す二本のハサミの先だけが……数分前まで、それが確かにザリガニの形をした生き物だったことを物語っていた。

……これが、腐敗の雲の威力。

俺はこの時、ウィンドウが敵でなかったことを心から神に感謝した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7580t/>

続RPGっぽい異世界なう。

2011年12月14日01時54分発行